

2人の教官と最弱の小隊 growth record

トランサミン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

裏切り者の元エースと特務小隊の現エースという

2人の教官に指導されることよって

最弱のFランク小隊は強くなる事が出来るのか

そして少女たちの淡い恋心はどうなるのか

文才はありませんが書いていきたいと思えます。

応援よろしくお願いいたします。

# 目次

概要紹介	1
オリ主紹介及び読み方説明	3
最弱の小隊	6
新たな任務	10
最強の教官たち	14
教官たちの真意	19
彼女たちの意思	25
レクテイの特訓	28
勝利の鍵は	31
奪われた空	35
初陣	39
最弱たちの頑張り	42
最弱と変異種	45
小隊集合	48
カズキの実力	50
少女たちは何を見る	54
訓練の成果と新たな戦い	59
クビを賭ける少女達	61
カナタとユーリの出会い	64
不穏な事件と新たな特訓	67
実力差とご褒美	71
カナタの思いとユーリの想い	75
想う力は糧となる	79
仲間を想えば見えるもの	83

ご褒美と事件の予兆	86
ガールズトーク	89
蠢く闇	94
模擬戦開始	97
決着、そして：	100
歪んだチカラ	104
もう一つのジョーカー	109
全てを貫くもの	115
敗軍の将？	120
カズキの企み	125
ユーリ菌？	127
大きすぎる力	136
カズキの過去	142
殲滅する剣	151
もう1人のアイゼナツハ	155

## 概要紹介

ここはミストガンと呼ばれる空中都市。

人間は魔甲蟲と呼ばれる存在に地上を追われ

空中に避難して生活をしていた。

しかし空中であってもその脅威はなくなることはない

そこで魔力を持つ人間は空戦魔導士となり魔甲蟲と

交戦する。

空戦魔導士を育成する組織がありその中には

階級などもそんざいする。通常はEランクまでなのだが

その中にFランク小隊と呼ばれる者達がいた。

最弱と言われるE―601小隊

その小隊に新しく教官を就けることとなった。

しかしその小隊の成績が余りにも酷いため、

2人の教官が就く必要があると空戦魔導士課長は

判断を下した。

そしてその教官につく2人の名は

《黒の剣聖》（クロノス）と呼ばれた

カナタ・エイジ

彼はある事件をきっかけに裏切り者と称されてはいるが

特務小隊の1員である。口癖は「いつてなかったか？」

表向きは病気療養中だが実際は魔力の消失と

呪力の所持を隠すために特務小隊から離れている。

そしてもう1人

彼もまたカナタと同じく特務小隊の1員である。

《暗月の光》（アークナイト）の異名をもつ

カズキ・アルカラス

彼はカナタとは逆に膨大な魔力量を誇り様々な

魔法武器を状況に応じて扱う。

《幻影の騎士団》（シャドウパラディン）という

スキルを扱うこともあるが滅多に使わない。

特務小隊に所属2人が教官につくなど、前例がないがカナタは裏切り者、カズキはその監視役という名目で教官職につくこととなった。

最初は乗り気ではないカナタとカズキではあったがE―601小隊のにいる少女達に可能性を感じ、彼女達を強くすることを誓う。

それぞれが様々な問題を抱えている小隊ではあるが各々が光るものをもっている。

小隊長を務め魔砲剣を扱う

紅髪の少女、ミソラ・ホイットテール

恥ずかしがりで魔法双剣を扱う

金髪の少女、レクテイ・アイゼナツハ

自分を女神だといひ魔法銃を扱う

黒髪の少女、リコ・フラメル

彼女たち3人も初めは2人のことを認めることが出来ず無愛想な態度をとってしまう。

しかし教官である2人はそんな彼女たちを勝利に導くべく様々な訓練を課していく。

初めは訓練とは思えないようなものであったが、その訓練の意味を彼女たちが自分で気付き

教官である2人を少しずつ認めていく。

また、彼女たちが抱えている問題を教官たちは試行錯誤しながら解決し、彼女たちに勝利の鍵を与えていく。

果たして彼女たちはランキング戦で勝利することができるのであろうか。

また襲い来る魔甲蟲に対抗することはできるのだろうかこれは2人の教官と落ちこぼれ小隊の成長記録である。

## オリ主紹介及び読み方説明

オリ主概要

氏名

カズキ・アルカラス

所属

S128小隊

特徴

淡い空色の髪と琥珀色の目

使用武器

魔双剣別名：《絶対零度の剣》（フローラ）

普段は普通の魔双剣だがひとたび魔力を込めて振るえば空気を凍てつかせるほどの冷気を放つ。

魔弓《生命の弓》（アニメ）

攻撃不可能な弓、味方に魔力を受け渡すことが可能。

魔剣《海神の轟剣》（ジノビオス）※海神Ⅱわだつみ刃がない剣、込めた魔力が水の刃となる。

幻影剣《殲滅する剣》（ブラスタター・ダーク）

リミットスキル使用時のみ使用可能な幻影武器  
自らの魔力で生み出す黒き大剣。

異名

《暗月の光》（アークナイト）

使用剣術

《左の聖剣》（アルトリウス）

左手で武器を扱うことで武器本来の実力を発揮する

《魔力の残光》（キアラン）

魔力で刃をつくりあげる、振るった刃は光の如し

制限戦技（リミットスキル）

《幻影の騎士団》（シャドウパラディン）

自らの魔力で大量の幻影の騎士を生み出す

オリ主の癖

頭をなでなでする。

口癖：それって、くって事だろ？

戦績

カナタ・エイジと共にS128小隊で前衛をこなしていたカナタが部隊から離れた今、彼の代わりにエースを果たしている。

カナタの事故に責任と自分の無力さを感じている日々の努力とカナタの手伝いを欠かさずしている。性格

楽観的な性格で何事もプラスに考えているためいつもヘラヘラと笑っているように見えるが

戦闘時等に見せる真剣な表情は彼の戦闘に対する真剣さが見て取れる。

リミットスキル使用時は近寄り難い雰囲気醸し出すまたトラブルに巻き込まれることが多い。

語句の読み方説明

《学園浮遊都市》

通称：ミストガン

物語の舞台であり、魔甲蟲によって地上を追いやられた人々がくらすばしよ。

《空戦魔導士科》

通称：ガーディアン

《後方支援科》

通称：ロジステイクス

《空戦魔導士科長》



通称：ガーディアンリーダー  
フロン・フラメルの役職である。

《空戦魔導士教官》

通称：エキスパート

《特務小队》

通称：ロイヤルガード

カナタ、カズキたちが所属するS128小隊の名称。

《漆黒の魔砲剣》

通称：グラディウス

カナタ・エイジが扱う魔砲剣の名称である。

《左の護剣》

通称：マインゴーシュ

カナタ・エイジがダガーを用いて使用する剣術。

《寂滅姫》

通称：ニルヴァーナ

S128小隊の隊長クロエ・セヴィニーの異名である。

《全てを貫くもの》

通称：トリシューラ

S128小隊の副隊長ユーリ・フロストルの扱う

魔槍の名称である。

魔力噴出機構、魔力式分子超振動機構（シュナイダー）

搭載の魔槍である。

## 最弱の小隊

女神の私が宿題をやる必要がどこにあるのだ。

「……あのう、この子本当に予科2年生なんですか……？」

「……そういうことになるわね」

信じられないというような声を発しながら

資料に目を通していた。

指名：リコ・フラメル

内容：宿題未提出の反省文再々々提出

判定：不合格

講評：宿題をやつてこなかったことを反省する文のはずです。あなたは腐りきつた性根を自慢したいところでしょうが、予科2年生にもなつてそんなことではいつまでたつても落ちこぼれです。日々努力するためにも

再々々々提出を求めます。

「なんというか……どうして在籍してられるんですか？」

「……とある類い稀な才能があつて見捨てるのが惜しいという声があつたのよ」

「こんな妄想じみたナルシストなのに只者ではないということですか？」

「知らないわよ。わたしにあまり訊かないでくれる」

「ええつと……次の子はレクテイ・アイゼナツハちゃんですね、資料はあまり揃っていませんが志望動機だけはあるみたいです」

わ、わたしには……ゆ、夢がありますっ！

大空を自由自在に飛び回って、空戦魔導士として浮遊都市の人々を守るために魔甲蟲と戦うことです。

魔甲蟲と戦うことはとても怖くて考えただけでも身震いします。で、でもっ！誰かを守るために

戦えることつて幸せことだとおもいますっ！

私の魔双剣術を大事な人々を守ることに役立てるために

どうしても空戦魔導士になりたいんですっ！

わ、わわわ、わたしっ！この都市の平和を守るために

ここに来ましたっ！

エグザイル歴 439年 3月8日

レクテイ・アイゼナツハの面接時志望動機より抜粋

コメント：おどおどして落着きがなく喋るのも必死の様子でした。入学時の試験成績も芳しくなく当初は不合格にしようと思っていたのですが魔双剣術の名門の

出であることと、彼女の真摯な態度に心を打たれました

空戦魔導士候補生として彼女の今後の活躍に期待します

「すごいしつかりした子なんですわね」

「いい奴にかぎって早死するのがわたしたちの学科よ」

「うくん、でもこの子は大丈夫ですよ。誰かを守ることの大切さを知っていることは強いんです」

「《寂滅姫》のクロエに言われると信じたくなくなるわね」

「あはは、空戦魔導士科長がおっしゃるほど大したものではありませんせんよ」

「でも、あなたの部隊には優秀な人材が多く育ってるわよ。昨年の学内ランキング戦でえーAランク小隊の中でも1位に輝き、今やSランカー特務小隊として今年のランキング戦に参加できないほどじゃないの……。」

まああの2名を除いてね」

「もしかして……カナタとカズキのことですか？」

「そうよ裏切り者のカナタ・エイジとカズキ・アルカラス」

「……………どうしてですか？」

「カナタ・エイジはあなたの小隊のエースとして

活躍していた時代はまだ良かったわ、でもSランク小隊への昇進がかかった大事な試合に無断欠場したあげく

その後の特別任務には一切参加せず、今は後方支援科の手伝いをしているらしいとかね、仲間からも裏切り者扱いされているそうじゃないの。

そしてカズキ・アルカラスは今も特務小隊で活躍し

カナタ・エイジの後を継いでエースをしているそうだけど、彼、最近カナタ・エイジの手伝いをしているそうじゃないのそれでも特務小隊の一員かしらね」

「問題はありませんよ、結果としてわたしたちは特務小隊になることが出来ましたし、2人もわたしたちの仲間に変わりはありません」

「まあ……いいわ、この子があなたの部隊から2人選出される教官たちに任せたい最後の人物よ」

指名：ミソラ・ホイットテール

試験内容：予科1年生前期実技試験（前衛個人試験）

戦績：0勝57敗

総評：努力すればきつと勝利することができると思います。

試験内容：予科1年生前期追試験（前衛個人試験）

戦績：0勝10敗（現在67連敗中）

総評：努力さえ続けていればきつと勝利出来ると思います。

試験内容：予科1年生後期実技試験（前衛個人試験）

戦績：0勝57敗（現在124連敗中）

総評：努力しても越えられない壁があるかもしれませんが

試験内容：予科1年生後期追試験（前衛個人試験）

戦績：0勝10敗（現在134連敗中）

総評：………自主退学を推奨します。

「こ、この子は危なそうですね」

「魔砲剣を使うらしいのだけど動きが鈍いらしくてね

魔甲蟲と相対せば真っ先に墜ちるわ」

「魔砲剣ですか、随分時代錯誤な武器を使うのですね」

「そうね、魔砲剣は裏切り者を連想させるからあまり気が進まないのよ、それでねあまりにもこの子達で構成されたE-601小隊が弱いから、あなた達特務小隊の力を貸して欲しいのよ」

「普通の教官では厳しいですものね……それで特務小隊2人を教官にす

るわけですか、しかしこれといって推せる人物は…」

「断っておくけど、空戦魔導士科長としてクロエ・セヴィニーに要請しているのよ拒否する権利は貴方じゃないわ」

「でも…2人かあ…あっ！、いえ失礼しました、確認したいことがあります」

「言ってみなさい」

「私が知った推薦する隊員が空戦魔導士科の教官として採用されるんですよ」

「ええ、あなたの率いる特務小隊からの出向者となればわたしの誇りにかけて必ず採用するわ。

それでいったい誰にするのよ？私としてはあなたか副隊長のユーリ・フロストルを期待してるんだけど」

「その件ですが、カナタとカズキにします」

「えーっと…もう一度言ってくれるかしら？」

「カナタ・エイジとカズキ・アルカラスです」

「断るわ！」

「でも譲りませんよ？」

「なぜ彼らなの？あなたも裏切られ、手を焼いているでしょう？」

「でも、私が推薦した人物を空戦魔導士科長が採用して下さるんですよっ。」

「…理由をきかせなさい」

「そうですね…理由は…」

## 新たな任務

「はあ…ついてねえなあ…」

そうやって歩いているのはカナタ・エイジ

ロイヤルガードの元エースであり裏切り者と

称されている。

今日は色々とおつたらしく遅れて登校してると、

リノリウムの廊下で話し込む3人から注目された。

先程までの会話は中断され何やらその空間だけが

奇妙な静けさと緊張感を漂わせている。

カナタの存在を認識するとガーディアン本科1年生の

ユーリ・フロストルの瞳に敵意が宿った。

「相変わらずの無責任ぶりですね。もうすぐ4時限目が始まる時間ですよ」

「げっ、もうんか時間だったのかよ？」

「時間さえ守れなくなるとはやっぱり先輩は裏切り者ですロジステイクスの手伝いばかりしているガーディアンの学生などこの学校にはふさわしくありません」

「なんだよ、まだあのこと根に持ってるのか？」

「いえ、考えるのをやめました。先輩の事について考える時間すら惜しいですから」

そうはいつでもユーリがあのことを考えなかった日はない。ミストガン最強の小隊が決定する大事なランキング戦当日に、カナタは無断欠席したのだ。さらにそれ以来カナタは小隊活動には参加していなかった。

「やっぱり根にもってんじやんか」

さらりと逆撫でする様なことを言うカナタにユーリは

かっとなって掴みかかろうとしたが

「ごらごらユーリ。カナタにあんまり突っかかっちゃダメだよ」

「そうだぞユーリ、カナタにも色々あるんだ」

そうなる寸前でクロエとカズキに宥められる。

「根に持つてませんに突つかかってません。ただ事実を述べただけです！」

「ほら、そういうところが根に持つてゐるっていうんだよ」

そう告げられ、ユーリはカナタをきつと睨みつけた。

「そんな睨むなよ考えることはやめたんだろ」

「……………失礼します！」

そういつてユーリは震える手を握りしめて足早に去って行ってしまった。

クロエがその姿を見送りその後カナタに問い詰める。

「あんな言い方だめだよ。ユーリが怒るに決まってるじゃないの」

「ユーリは感情のコントロールが苦手だからたまには発散させたほうがいいんだよ」

「ユーリはカナタのこと慕って入隊してきたからな、シヨックがまだ抜けないんだろさ、それにカナタのこと大好きだからなーあいつ」

カズキがさらつとといった爆弾発言はカナタには理解できなかったようだ。

それに続いてクロエが話す

「あの事故のことユーリに話さなくていいの？カナタは私を庇っただけなのに…」

「任務中に負傷したのは、そいつに状況は無傷で切り抜けるだけの力が無かったってことだろ」

「それでも罪悪感感じちゃうよ…だから2人にいい話を持ってきました！」

「いいはなしって？」

「カナタへの罪悪感はわかるけどなんで俺も？」

「まあいいから昼休み一緒にガーディアンリーダーの執務室にきてね」

そして昼休み

「失礼します」

クロエに続いてカナタとカズキも入室していく。

そこにはガーディアンリーダーの少女フロン・フラメル姿があった。

「あんたがカナタ・エイジ。裏切り者の貴方がよく私の前にぬけぬけと顔を出せたわね、それにカズキ・アルカラス貴方も最近小隊活動を休みがちらしいじゃないのしつかりしてちょうだい」

「寧ろ来たくなかったくらいだけど…呼ばれたから来たんだし」

「あはは…耳が痛い…」

「ま、まあ今日はそんな小言を言うためによんだんじゃないわ、この辞令をうけとりなさい」

そう言われ2人はフロンから書類を受け取る。

その紙に書かれていたことをカズキが読み上げる。

「支給品に出席名簿？それに考課表、プロフィールシート…？これから就く職務がエキスパートって…俺達に教官やれってことですか？」

「まじかよ…」

そういつて2人とも眉にシワを寄せる。

「その通りよ、本日の午後からの実技訓練は全て教育に充てなさい、このことはあなた達の小隊長も承認済みよ…担当するのはE-601小隊成績が芳しくなく、ランキング戦全敗の所謂落ちこぼれの集まりよ、苦労は絶えないでしょうが、魔甲蟲と戦えるだけの絶対的な力を持つ空戦魔導士の育成をおねがいね」

「カナタ…これ断れなそうだしやるしかないよ…」

「カズキもそう思うか…しかしなんで俺なんだ…カズキはわかるぞチームのサポートも上手いしな、だが俺はスタンドプレーやらワンマンやら言われてるのに」

「だそうよっ…」

「私は知ってるから、訓練のあとユーリの特訓付き合っただけたりし



「てたじやない」

「ああ、わかったよ：じやあ行くかカズキ」

「あーカナタ先行つてよ、合流は空でいいかな？」

「ああ、わかった。資料を見た限りその方が俺も助かる」

「どこへ行くの？」

「E―601小隊室だよ一応教官だからな」

「俺はカナタがやるだろう今日の訓練の準備かな疲れそうだけど」

「まあ、そういうなつて」

そういつて2人は執務室を後にしていった。

「本当に大丈夫かしら…」

フロンはやはり心配なようだ。

「大丈夫ですよ、何も出来なかった私をここまで強くしてくれたのはカナタですし、カナタのことを一番わかってるのはカズキだとおもいますから」

「あなたが言うなら信じましょうか」

しかしフロンはやはり2人を教官に据えることに一抹の不安を覚えざる得なかった。

## 最強の教官たち

「な、なんであんたがここにいんのよ!!」

「俺の名前はカナタ・エイジ。今日から教官として赴任した。ガーディアン本科2年17歳だ。よろしくなもう1人いるんだがそいつには準備してもらってるから後で紹介する」

「こ、股間に苳ジャム塗りたくったヘンタイがなんで教官なのよっ!」  
「ふっ、違どうぞこの者は苳ジャムなど塗りたくっていなかった、水飲み場でズボンを脱ぎ、ビーストモードになろうとしていた」

「あ、あのう…、わ、私が見た時は女子トイレでそのう…」

第一印象は最悪だった、今日の朝カナタが遅れたのは彼女たちとのトラブルが原因である。

「細かいことは気にすんなよ、それよりとっとと自己紹介してに話進ようぜ」

「何が話を進めるよ!下心まるだしで資料碌に見ないで指導しに来たんでしょ!」

「うるせーよ、苳ジャムのお前はミソラ・ホイットテールだろ。ガーディアン予科2年生14歳資料には実技試験の評価で自主退学推奨って書いてあったな」

「う、うっさいわねっ!私の実力は実技試験じゃはかれないのよ!」

「次にリコ・フラメル、ミソラと同じ年だな実技試験Fってなんだ?自主退学推奨でもEだぞ?」

「ああ…そのことか、朝から髪型が決まらなくてな受けていないのだ。女神な私の実力を把握するのは不可能だからな」

「最後にレクティ・アイゼナツハ、2人と同じ年だな」

成績が安定していないようだけど手でも抜いてるのか?」

「いえ、その調子が上がらなくて…そのう…ごめんなさいっ!」

「よし、自己紹介も終わったし空に行って実技訓練を…」

「待ちなさいよっ!」

ミソラが話を遮った。

「ヘンタイのあんたが教官なんて認めないわよっ!」

「でもほら、ちゃんと暗記してただろ？」

「そんなの体に興味があつたから必死に覚えたんでしょ！」

「子供(ガキ)の体になんて興味ねーよ。てかあんたじゃなくて教官が名前で呼べよ俺にはカナタ・エイジって名前があんだからな」

「~~~~~っ！」

ミソラはカナタに言いくるめられてしまった。

「カナタ・エイジって…裏切り者のカナタ・エイジじゃないの！」

「そのう…ミソラさんお知り合いなんですか？」

リコも気づいたようだがレクティはきよとんとしているようだった。

「クロノスなんて称号もらいながら特務をさぼってるのよっ！」

「そんなことはどうでもいいんだよ、もう1人の教官を空で待たせてるんだから早く行こうぜ、それにしてもお前ら悔しくないのか？ランキング戦かったことないんだろ？」

「ば、ばかにしないで！」

あからさまな挑発に3人とも乗ってしまった。

「別に馬鹿になんかしてねーよ。ただ悔しくねーのさって訊いただけだろ？」

「悔しいに決まってるでしょ！何よその言い草っ！まるで私たちが努力を怠ってるみたいじゃないのっ！」

「うむ、君の発言は不適切だたしかに私には努力は必要ないが女神な私には実力はふそくしてないぞ？」

「わ、わたしもちゃんと頑張ってますっ！」

ちゃんとやる気ある奴らなんだなあとかナタは3人を見ながら思っていた。

「俺たちがやる気のあるお前達に指導を施すんだよ、

想像してみろ自分たちより強い小隊を打ち破り魔甲蟲を相手に活躍する自分たちの姿を」

軽口を叩いているようだが彼の瞳は真剣そのものだ。

「で、でも裏切り者のあんたなんか…」

「なんだ？指導者が裏切り者だっていう予防線ハツときたいのか？そ

れにもう1人の教官は裏切り者なんかじゃないぞ」

「そんなわけないでしょ！指導者なんか関係ないっ！」

一番大事なのは強くなりたいてって気持ちなのよっ！」

「ミソラは現役時代の俺の動きをしってるんだろ？」

「そりゃ、あんたの動きくらいは何度も見てるけど…それがどうかしたの？」

「だったらさ、当時の俺と同じ強さを手に入れるために、俺の指導を受ける気にはならないか？それにもう1人の指導者の動きだって見たことあるさ、第一線で活躍する空戦魔導士だからな」

「う、うう…い、一度だけなら受けてやってもいいわ！」

そういつてまでもミソラは言いくるめられてしまった。

しかし

「私は反対だ」

「ん？リコだったよな。どうしてだ？」

「汗をかくような訓練はしたくないのだ、肌が荒れる」

リコがそういうとミソラと口喧嘩をはじめてしまった。

しかしカナタが遮る

「リコは実技訓練Fなんだよな？」

「だからどうしたんだ？私は女神な実力の持ち主だ実技訓練など不要なのだから当然だろう？」

リコが誇り高いことを見抜いたカナタは

「でも、俺はリコの実力をみてないから

このままだとミソラ以下ってことになるぞ？」

「それは心外がな…いいだろう1度実力をはつきりさせなければならぬ」

「よし、最後にレクティはどうする？」

「わ、わたしは…」

「どうしたの？レクティ言いたいことがあったらはつきりいう」

ミソラに促され

「や、やりますっ！カナタさんたちの訓練を受けさせてくださいっ！」  
そういつてミソラたち3人はカナタたちの指導を施されることと

なった。

空中浮遊都市ミストガン上空にカナタたち四人は向かっていた。

「そういえばあんたはなんでホウキを使ってるのよ」

ホウキとは新入生などの魔力切れを防ぐための移動手段なのだが

「ん？ああ、俺はこれに慣れてるんだよ」

「会えて飛行魔術を使用せずに機動力に劣る道具を使うなんて…、はっ！…もしかして元エース様にとってはこの程度のことです飛行魔術を使う必要ないって意味っ!？」

ミソラが刺のある口調で責め立てるがカナタは全くいにかいせず

「そんなことねーよ、まあ俺とお前らの実力差なら確かにそうだけだな、それに今日の訓練でお前らを鍛えるのは俺じゃないあいつだ」

「カナタおそーい、待たせすぎだよ」

「わるいわるい、少しこいつらめんどくさくてな」

「~~~~~っ!」

ミソラにぐぬぬと怒りがこみ上げるがカナタが話している相手を見て吹き飛んだ。

「カ、カズキ・アルカラス!？」

「ん、そーだよ、こんにちはミソラ、リコ、レクテイ

これから君たちの教官をすることになりましたS128小隊のカズキ・アルカラスです、よろしく」

「こ、この人はだれなんですか…?」

レクテイが問いかけると今度はリコが答えた。

「知らないのかレクテイ、彼はロイヤルガードでカナタ・エイジがの後を継いでエースをやっている男だ」

「そ、そんなすごい人たちが教官なんですかっ!」

「堅苦しくならなくていいよ、仲良くしよ、ね?」

「は、はいっ!」

カズキの言葉にレクテイが返事をする。

そしてカナタから今日の訓練の内容が発表される。

「今日の訓練は鬼ごっこだ」

「「お、鬼ごっこ……!?!」」

## 教官たちの真意

「?何をそんなに驚いてるんだよ?予科1年生の時に散々飛行訓練としてやっただろ?」

「そ、そういうことじゃなくて、なんであんなたちみたいないない教官がいてそんなレベルの低い練習なんてするのよ?」

「そうだ。この私の実力を試すために、そんな低俗な練習を施すとは……ふざけているのか?」

「あのう……、ちゃんと訓練してくださいっ!」

3人はカナタに意見を述べるがカズキが

優しそうな表情でこういった。

「まあまあ、とりあえずルールを聞こうよ、そうしたらそんなに簡単な訓練じゃないってわかるからさ」

その言葉に3人は大人しく従いカナタの説明を受けた。

「お前らはミスリル武装で容赦なくカズキを攻撃してよくて、そこでカズキを撃墜することが出来たら終了だ。俺はお前らの実力をちゃんと見てやるからな」

それじゃあ訓練開始な」

カナタは簡潔に説明を終えホウキを操りさらに上空に上がっていった。

「じゃあ俺も逃げるからさ、本気で来てね、じゃないとこの訓練は意味ないからさ」

そう告げるとカズキも飛んでいってしまった。

「なによ、この超初心者訓練っ!あいつら私たちを強くする気あるのかしらっ!」

ミソラが嘆いていると、隣にいたリコが意図を理解したよう

「ふむ……あながち馬鹿でもないかもしれない彼らは」

「も、もしかすると基礎体力をつける訓練なのではないでしょうか……」

「それにしたって、武器を使っていいなんてなめてるじゃない!3人がかりでさっさととっ捕まえて訓練の意味を吐かせるわよ!」

そういつてミソラは魔力を急加速に備え調節する。

レクテイもミソラについていこうとするがリコだけは沈黙したまま動こうとしなかった。

「?なんで動こうとしないのよ」

リコは長い髪をかきあげ答えた。

「ふつ、私はミソラのような凡人と違って実技訓練など疲れることは必要ないのだよ」

そういつてまた口論になる。

終いにはミソラが1人でとんでいつてしまった。

それに続いてレクテイも飛んでいく。

それを見てリコは

「何の策もなしに追いかけるとは愚かな奴らだ」

嘲笑うかのように呟いた。

その様子を上空から見ているカナタは

「ほんとチームワークない小隊だな」

難しい顔を浮かべていた。

しばらくしてミソラがカズキに追いついたり

「なんだ? たった1人で俺を捕まえるきなのか?」

「じゃなきやここにこないでしょ。ソーサラーフィールドなしで武装使つていいつて言ったんだから怪我しても知らないわよ」

「その心配はないよ。当たる気なんてないからさ、それにスタンドプレーなんてカナタみたいだな」

カズキは笑いながらそうくちにする

「か、覚悟しないよっ! あんな裏切り者と一緒にしないでっ! 負ける気なんてないから」

そういつてミソラはルーンが刻印された指輪



マジスファイアへと魔力を注ぐ。その固有魔力波に反応して大振り  
の剣が現れる。

「白銀の……魔砲剣、か」

それを見た途端カズキは興味深そうに目を細める。

それは二人を見ているカナタも同じであった。

「覚悟しないよっ！」

そういつてミソラはカズキに切りかかる。

しかしカズキは完全に見切っており少し体を捻るだけで躲してしま  
った。

「惜しいっ！あとちよつとで仕留められたのにつ！」

連続で斬撃を繰り出すミソラだが1発もカズキに当たることはな  
い。カズキも怪訝そうな顔をしている。

「もー！ちよこまかちよこまかとっ！とつとと墜ちなさいよっ！」

ミソラは力の限り大剣を振るうがカズキは簡単に躲して見せる。

すぐ届きそうな斬撃の間合いには2人の圧倒的な力の差が現れて  
いた。

「斬撃が鈍いな、それじゃあ打撃だよ。もつと鋭く切り込めないのか  
？」

「うっさいわねっ！とつとと墜ちなさいよっ！」

正直、ミソラの剣術はお粗末過ぎて目も当てられない

カズキはカナタに視線を送るがカナタも呆れている  
ようだった。

そこでカズキは他の少女たちの実力も知りたいと

ミソラにフエイントをかけることにした。

「ちよつと、あんた逃げるつもり!？」

カズキは速度を6割程度出しミソラから離れていく。

「まちなさいよっ！」

カズキは目を疑った。ミソラが瞬く間に距離をつめ

斬撃を繰り出してきたからだ。

さらに肩で息をしているようだがスタミナもまだあるようでス  
ピードも衰えていない。

「じゃあこれならどうかかな」

そういうとカズキの動きが止まる、そしてカズキにミソラの攻撃が通ったと思われたが

「えっ」

カズキの、体をすり抜けてしまった。

「あんな簡単なフェイントにかかるんだ…まあ幻影魔術はまだ見切れないか。」

そういつて遠くからミソラを見ているカズキであった。

そうしてカズキは最初にいた方向をみて他の2人を

探したが当然そこにはいなかった。

だが、すぐそばに人の気配、カズキが気づいて振り向くと、おどおどしながら魔双剣を構え上目遣いでこちらを見る、レクテイの姿があった。

おどおどして自然体ではないが、カズキにはスキがないように思えた。

「あのう…カズキさん…」

「どうしたんだい？かかっておいでよ」

「……いい、いきますよっ！カズキさんっ！」

カズキは短剣？のようなものを左手の指輪から展開し

右手に構え対峙した。

その理由は彼女の8双構えそれだけだった。

その構えをみたカズキは光るもの感じた。

レクテイがかなりの実力者である可能性が高いと判断したのだ

「どうかしたの？……手でも抜いてるのか？」

「そ、そんなことありませんっ！」

レクテイの動きは妙だった。時にはカズキも目をみはるような鋭い攻撃を繰り出すのだが節々がぎこちないような感じがするのだ。

そのぎこちなさがなければ、蝶のように舞い蜂のように刺す流麗な動き演舞のような魔双剣術だった。

「レクテイ、魔双剣術ってもしかして…お前…」

そうカズキが呟くとレクテイは顔を見上げ顔を真っ赤にして

「そのう……、す、すみませんっ！」

謝ってきた。

レクテイの謝罪に首を傾げるカズキだが背後から鋭い殺気を感じ後ろを振り向いた。

レクテイカズキが振り向いているのには気付かず同じところばかりを弱々しく切りつけるだけで

カズキはいとも簡単に受け流している。

振り向いた瞬間リコから強烈な魔力弾が放たれた。

カズキはその魔力弾を躲そうとしてそれをやめた。

「くっそー！」

彼の奥にはリコの魔力弾に漸く気づいてあおぎめる

レクテイの姿があつたらかである。

カズキは咄嗟にレクテイをだき抱え短剣？をもう一本展開しその魔双剣で魔力弾を防いだ。

「くっ……、外したか」

心外がそうな面持ちでリコが近づいてきた。

2弾目を放たないのは実力差を理解したのだろう。

「狙いは悪くなかったよ、でも少し殺気を殺しきれて無かったかな」

そう2人が話しているとカナタがやってきた。

「今の狙撃、打ち合わせていなかっただろ？」

カナタの間にリコが答える。

「乱雑な動きで所構わず動き回るミソラとちがって

レクテイの動きは洗練されている。その動きに合わせたまでだ、女神な私からすれば当然だな」

「お前さ、もう少し同じ小隊の仲間のことを大切にしてやれよ」

レクテイは余程怖かったようでカズキの腕のなかで縮こまっている。

するとミソラがやってきた。

「うわー、ミソラまだ体力残ってたのかよ、俺はもう疲れたしレクテイのこともあるからカナタに相手してもらってくれ」

カズキはレクテイの頭を撫でながらそう言った。

「な、なんでそんなに残念がるのよっ！あんたより私が強いことを証明してやるんだからっ！」

それからしばらくのあいだ鬼ごっこが続いた。

しかしリコは攻撃せられたような表情を見せカナタも苦笑している。

カズキは依然として怖がったままのレクティを  
だき抱えながらミソラから逃げていた。

## 彼女たちの意思

訓練終了後ミソラたち3人はシャワーを浴び汗を流した後、下着姿になり着替えていた。

ミソラはカズキを3人がかりでも撃墜できなかったことを嘆いているようだった。

しかし論点はもつれていき胸の大きさの話になり

リコとレクテイに比べ胸の小さいミソラが怒ったり

それにリコがきつい言葉をかけたりと

チームワークには程遠い実態を晒していた。

翌日の実技訓練E―601小隊室

カナタが入室するころには3人が揃って彼のことを

待ち受けていた。

「へー、まだ時間あるのに揃ってるなんてお前らなかなか見どころあるじゃねーか」

「あのう…カズキさんはいないんですか…?」

「ああ、一応あいつもロイヤルガードだから…ってミソラ、なんでお前は目を輝かせてるんだよ?」

「べ、別に輝かせてなんかないわよっ!でも、す、少しだけどんな訓練を施すのか期待してるかも…」

どこか拗ねているように見えるがミソラは2人の教官のことを認めつつあるようだ。昨日の訓練で彼らの実力を思い知ったからである。

「わ、わたしもお2人からのご指導を受けられてうれしいですっ!」

「断つとくけど訓練は辛いもんだし楽しんで強くなれるようなもんじゃないし、それに舞い上がるような訓練内容じゃねーぞ」

そういつてカナタはリコの姿を注意深く探っていた。

カナタの視線に気づいたがリコは

「わたしは訓練などに付き合うつもりはないぞ。わたしの狙撃術はもはや女神の領域だ」

「ちよつとリコっ！いくらヘンタイだからって一応教官なんだからその態度はなに！」

ミソラが慌てて咎めるが

「ヘンタイじゃねーって、まあ狙撃センス、状況判断能力には非の打ち所がねーよ。少なくともこの中では一番戦えるのはリコだ」

「ふむ、もつともつと褒めてくれて構わないぞ。どうやら君たちも只者ではないらしいな」

「お前はカズキとの実力差に気づいて引き金を1回しか引かなかったからな、ちゃんと戦闘をイメージできてたんだろ」

「わたしは基準以上の実力を備えているよつて訓練は受ける必要がない」

そういつてリコは小隊室を後にしていった。

「ちよつとリコっ……………」

「いいからほつとけつて…想定範囲だし、他人より先に自分のことだ」

カナタは2人が落ち着くのを待つてから問いかけた。

「そんで訓練のことだけど、これから俺がミソラに、カズキがレクテイに個別に伝える訓練を最低一週間は続けることが条件だ。お前らにその覚悟はあるかよ？苦手なことでもやる覚悟のことだぜ」

「……………」

苦手なこと……………忽ちミソラとレクテイは沈黙する。

カナタの言葉は軽口のように酷く重いプレッシャーを放っているようだった。

「…………カ、カナタさんっ！」

なにやら思い立ったかのように席から急に立ち上がり

レクティはカナタに問いかけた。

「どうしたんだよ、そんなに緊張して」

「強く…、今より強くなるための指導を施してくれるんですよね？」

「ああ、カズキが指導するんだ強くなれるはずだぜ」

「な、なら私はだ、大丈夫ですっ！ど、どんな訓練にも

た、耐え抜いて見せますっ！」

「わかった、じゃあレクティはカズキの所に行け、きつとアルテミア寮の前で待ってるから」

「は、はいっ！」

そういってレクティはお辞儀をすると席についた。

「んで、ミソラはどうすんだよ」

「わ、わかってるでしょ。あたしも…イエスよ…」

歯切れが悪いミソラにカナタは改めて意思確認をする

「俺のこと目の敵にしてたんじゃねーのかよ？」

「無責任な理由で特務をサボるような人は大嫌いよ

でも、あたしの魔砲剣術はあいつには届かなかった

つまりあなたにも届かない、認めたわけじゃないけど

強くなるためなら利用してやるまでよっ！」

カナタは不敵そうに微笑んだ。

「へっ、お前らしい覚悟じゃねーか」

「あとう…カナタさん」

「ん、どうしたレクティ」

レクティがおどおどしながら問いかけてきた。

「どうして私たちは違う教官に指導を受けるんですか？」

「確かにそうね一緒にすればいいのに」

「ん、言ってなかったか？カズキは色んな武器を使うけどな、幻影魔法と魔双剣術ならミストガン最強のはずだぜ」

「い、いってないですう…」

「いってないわよっ！」

こうしてミソラとレクティの訓練が始まった。

## レクテイの特訓

「カナタはうまくやったかなー」

カズキはそうつぶやきながらアルテミア寮の前に立っていた。

というのもロイヤルガードの仕事を自室で行っていたのだ。そのため彼女たちの意思確認をカナタに任せ自分のもとへそのうちの1人が来ることになっていた。

「んー、成功してるといいんだけど」

そんなことをかながえていたが杞憂に終わったようだ。

「カ、カズキさんっ！お、お待ちせしましたっ！」

やってきたのはレクテイ・アイゼナツハカズキは彼女に指導を施すことになっている。

彼女がここに来たということはカナタがうまくやったということだ。

「お、遅れてしまって…す、すみませんっ…」

余程急いで来たのかレクテイは肩で息をしながら話す

「あやまることないよ、俺の仕事のことだから。落ち着くまでゆっくりしてから訓練にしような」

「は、はいっ！あ、ありがとうございますっ！」

レクテイの呼吸が整うまでしばらくのあいだカズキは待っていた。

「も、もう大丈夫です…」

「わかった、じゃあ訓練のしに行こうか」

「は、はいっ！」

そう言って2人はあるきだした。



「あとう：カズキさん：ここは」

「ん、ブティックだけど？」

「く、訓練と関係ありますか…？」

「当たり前だろ、ほらいくぞ」

「ま、まっってくださいよお…」

そう言つて2人は店の中へ入つていった。

そしてカズキはレクティに色々な服を試着させ

どんどん購入していった。

レクティもこれには意味があるのだと信じカズキの

指示に従っていたが、カズキの両手がいつぱいになり

4件目の店でもう一度カズキに問いかけた。

「あ、あとう：カズキさん：これでほんとに強くなれるんですか…？」

その姿は紺色のメイド服に身を包み、恥ずかしそうに

上目遣いでカズキを見上げていた。

そのあまりの可愛さにカズキの中で何か目覚めそうな気がした。

その後バニー服も購入し買い物を終了した。

「あのカズキさん、貴重な小隊活動費をこんなに使つていいんですか？」

「これも立派な活動だからいいんだよ」

「こんなにとくさん買つてどうするんですか？」

「レクティが全部着るんだよ、学校でな」

「へー、私が学校できるんですか…：…む、むりですっ！」

「大丈夫だろ、レクティは可愛いしどれも似合ってたし」

「そ、そういう話じゃなくてですねっ！あとう、は、恥ずかしいですっ！」

そう言っている間に更衣室までついてしまった。

「俺はここで待つてるから好きなのに着替えてこいよ」

「好きなのと言われても…これがなんのいみがあるんですか？」

「これがレクティの特訓だ、イメチェンして俺の隣を歩く、自分で言うのもなんだけど俺って結構注目集めるから、レクティも沢山見られるな」

「そ、そんなことで強くなれるのでしようかつ！」

恥ずかしがり屋のレクティにとつては難しいことだった。

「レクティの魔双剣術って、剣神アルバート・アイゼナツハが創始したアイゼナツハ琉魔双剣術だろ？」

「私の家のことをご存知なんですか？」

「カナタにきいてなかったか？俺も魔双剣をつかうんだ

しらないわけないだろ？鬼ごっここの時さ1番凄くて1番凄くなかったのがお前だったんだ」

「そ、それってどういうことですか？」

「レクティの剣戟はすごかったよ、ちゃんと相手を見据えて繰り出すことができればAランクの小隊とも互角に

戦えると俺は思ってる」

褒められているがレクティは冴えないままだ

案の定彼の言葉には続きがあった。

「でもレクティは俺と視線を合わせることもできなかつたし、ほとんど力を出せて無かつただろ？」

「わ、わたしは、あ、あがり症なんですっ！」

レクティは自分のコンプレックスをしどろもどろになりながらも説明していった。

それを聞いたカズキは

「いいじゃんか、コンプレックスがあつたつてさ

克服する努力をすればいいんだから」

そういつてレクティの頭を撫でてくれた。

「レクティは変わりたいと思うか？」

「は、はいっ！変わりたいですっ！人前に出ても恥ずかしくもないようにっ！」

「じゃあこれから1週間は俺とデートだ、途中一人になるようなこともあるだろうが極力は一緒にいるからな

じゃあいこうか」

「は、はいっ！」

こうしてレクティのあがり症改善の訓練が幕を開けた。

## 勝利の鍵は

「お願いします…試合に出てください…ひやうっ！」  
「つたく、何やってんだよ」

カナタは小隊室にはいつたとき驚いた。  
ミソラがリコに跪きお願いをしていたからだ。

レクティの説明によれば2人が訓練にでってくれるよう  
リコに頼んだらしいのだが断られ、せめて試合に  
だけでも出てもらおうとしていたらしい。

それを知ったカナタは

「そうだな、勝てない試合に挑んで負けるのはたしかにかっこ悪いよ  
な」

「ほらみろ、彼もそう言っている」

「でもな、勝てる可能性もあるってのになにもしないのは、俺の性分には  
あわねーよ。ミソラ、俺がお前に勝利の鍵を与えてやる」

ミソラに勝利の鍵を授けるようだった。

「あのう…カズキさん…カナタさんはミソラさんに何か教えるらしい  
んですけど、私にはなにかないんですか？」

「んー、レクティはあがり症は治ってきただろ？だからもう本来の力  
が出せるはずだ」

「そ、そうですか…」

自分も何かさずけて欲しいと思っていたレクティは  
少し気が沈んでいた。

「でも…」

「で、でもっ?」

「レクテイ手を出してくれ」

「は、はいっ！わ、わかりましたっ！」

おどおどしながらも手を差し出すレクテイ  
するとカズキはレクテイの手を握り話し出した。

「レクテイ、俺の手の温度はどうだ？」

「あ、あたたかいですっ！」

「じゃあこれはどうだ？」

「っ…！なんだか熱くなりましたっ！」

「これはな？魔力の流れを少しだけ手に集中させたんだ

これを武器に応用すると、面白いことになるぞ？」

「そ、そうなんですかつ？」

「レクテイはアイゼナツハ流魔双剣術飛炎衝天撃わかるよな？」

「は、はいっ！もちろんです…で、でもつかえる自信はありません…」

「昔戦った、アイゼナツハ流魔双剣士に俺もそれを使われてな、考えた  
んだよ少し見ててくれ」

そう言うとカズキは魔双剣を構え

「魔双剣技、蒼炎衝天撃っ！」

そう言い放つとレクテイは目を疑った。

彼の放った魔双剣技は自分の流派のそれと類似しているが、炎が蒼  
かったのである。

「まあ、こんなことだよ」

「い、いまのはなんですかつ！」

「んー、原理的には飛炎衝天撃と同じだな、ただ魔力の

練り方がちがうんだよ。自分の魔力を緩やかに練り上げるイメー

ジかな、時間がかかるから予め準備しとかないと使えないけどな」

「で、でもっカズキさんは使えたじゃないですかっ！」

「まあ、それは日頃の鍛練の成果って奴だ」

そういつてカズキは微笑んだ。

「わ、わたしもっ飛炎衝天撃が使えるようになったら

ためしてみることにしますねっ！」

「おう、じゃあ訓練頑張ろうな」

「ひゃう…はう…」

そういつてカズキはレクテイの頭を撫でている。

レクテイも恥ずかしがってはいるが嫌ではなさそうだ。

そんな2人の姿を見つめる者がひとり。

「ふむ、カナタといいカズキといい彼らはスキンシップをとらずには  
いられないのか…？しかし…レクテイがあそこまで心を開くとは、私  
も彼らに指導をされればあの女を越えられるのか…いや…」

そういつて再び視線を二人に戻すがそこにはダミーと

戦っているレクテイの姿しかなかった。

「誰かと思つたらリコだったのか」

「き、君つ、ど、どうしてここにっ」

「見られてる気配がしたからな」

「そ、そうか」

気づかれていたのだと理解し、リコは不覚だとおもつた

「それにしても…、リコお前それ」

「こ、これはなんでもないっ！」

カズキはリコが普段かけていない眼鏡について問いかけた。

「まあ、千里眼を使うのに必要なんだろ？じやなきやこの距離で俺ら  
のことを認識できないしな、それにしてもリコ、似合ってるぞ、眼鏡  
かけても綺麗だな」

「そ、そうか。ありがとう…、そういえばだが何故千里眼のことを知っ  
ている？」

「自分の生徒のことは、把握しなきゃな、それでどうだ、訓練受ける気  
になったか？」

「ふっ、そんなものは女神な私には必要ないだろう」

「確かにお前は女神な実力の持ち主だと少なくともおもってるよ、な  
んで普段千里眼を使わないのかも事情を予想すればすぐにわかるこ  
とだ」

「ま、まてまてまて、いいからまちたまえ」

「純粹に褒められたリコはほほを染め照れているようだ。」

「まあ、訓練がいやっていうならさ試合だけでもでてくれよ。俺さ

ガードイアンリーダーに目にももの見せてやりたくてさ」

そういつてカズキは悪戯っ子のような笑顔をみせる。

「君はいろいろと知っているようだな」

「そうだ、リコ、そのためにはお前の力が必要だ

お前が欲しい」

「…っ！」

さつきとは打って変わって真剣な表情のカズキにリコは  
ドキリとする。そして

「君に興味が湧いた、汗をかくのは嫌いだが試合にはでてやろう」

「おう、頼んだ！」

そう2人が約束するとレクティイがやってきた。

「カズキさんもういいですか？」

「おつかれさまレクティイ」

そういつてカズキはまた頭を撫でた。

リコが難しそうな顔をしているがカズキは気にせず

「よっし、レクティイはこれまで頑張った御褒美

リコは試合に出てくれることへのお礼だ、アイス奢ってやるからっ

いてっい」

「あ、あいすっ！」

レクティイは目を輝かせてカズキについていく

「ふっ、こういうのも悪くないな」

「おーいリコ、置いてくぞー？」

「ああ、わかっている。すぐにいくぞ」

そういつてリコは微笑を浮かべつつカズキとレクティイのもとへ、  
ゆっくりと歩いていった。

## 奪われた空

ランキング戦当日

Eランク小隊同士の戦いなど好んでみるもの  
物好きな人間は少なく観覧席はガラガラだった。

相手のE571小隊はミソラたちをみて笑っている。

「これでDランク昇格は決まりだな」

「相手がFランク小隊でよかったよ。安心して戦える。」

「帰ったら祝勝会だな祝勝会」

Fランク小隊と蔑まれるミソラたちを脅威だと

思うものはいなかった。

「へっ、思いつきしこつちを見下してるじゃんか」

これから起こる何かを想像して愉しむかのように

カナタは不敵に笑っている。

「すっごいムカつくっ！」

「ふっ、矮小な人間ほど他人を見下したがるからな」

「それだとあんたも含まれるんだけど…」

「ふむ、女神なわたしは既に人間の目で測れる存在ではないからな」

「き、きんちようしてきましたっ！」

それぞれの思いを口にするミソラたちにカナタは

声をかける。

「お前ら知ってるか？こういう状況をひっくり返すのが一番楽しいんだぜ？それに見てみるよ、ここにいる…」

そういつて3人の緊張をほぐそうとしたのだが

〈ウウーン、ウウーン〉

突如鳴り響いた警報に邪魔される。

「何が起こってるの!？」

ミソラたちが戸惑っているとカナタはこういった。

「このタイミングでくるかよ…魔甲蟲…」

しかしカナタには焦りが感じられない。

流石元エースなだけあって修羅場にはなれているようだ。

同じS128小隊の仲間には哨戒任務に専念するように指示されているはずだから今日この瞬間も都市外空域で任務中のはず…

ま、クロエたちは大丈夫だろへまするようなやつじゃないしいざとなったらカズキも本気出すだろうしな。

そう思いつつ不安げな表情のミソラたちを見やり静かな決意をしたカナタは彼女たちと共に避難誘導区域にむかった。

「なあ、クロエ。いやな予感がする」

「カズキも？」

「どうしたんですか？クロエ先輩、カズキ先輩」

右方向を飛行するユーリが尋ねた。

現在は哨戒飛行中。高度は3200程度。

先日還らざる小隊が発生したためロイヤルガードを中心に哨戒ローテーションが組み直されたばかりなのである

カズキもロイヤルガードの1員、ミソラたちの試合を

見てやりたかったが役職上任務を優先していた。

「あのねユーリ、なんだが肌がざらつく感覚がしたの」

理解出来ないという顔のユーリを無視しクロエは濃密な雲海の合間を睨みつけている。

この距離ではわからないとユーリが調査をこそ見るべきだろうと周囲の仲間へ警戒を促そうとした時だった。

ガシャン。隣でメカニカルな機構が作動する音が聞こえた。振り向くとクロエが魔法杖を構え砲撃を行った。

その威力は射線上にあつた雲塊を捻り取るかのように切り取って



いた。

「消滅したようですね」

だがクロエは寧ろ警戒心を強めていた。

「違う、まだ終わりじゃないのよ」

「……はい。失言でした」

すると耳元の通信結晶にロイドからの通信が入った。

「どうしたの？」

「どうやら悪い報せのようです」

ロイドが努めて冷静に告げる。

「ミストガンへと近づく変異種（キメラ）の姿を確認、ミストガンでは非常事態宣言を発令したそうです。至急戻るようにと」

「戻って言われてもね…」

「まあ戻れる状況じゃねーのはわかってるだろうし。」

念のための報告だろうな

「いいんですか？クロエ先輩、カズキ先輩、ロイド先輩も…！」

「でもねユーリ。これを全部連れて帰る訳にはいかないでしょ」

「そんなことわかってるつもりですっ！でも皆さんが戻らなければ変異種の相手をする者がいなくなるじゃないですかっ！だからここは私が引き受けますから」

「ユーリだけでは無理でしょう。現状ならまだしも不慮の事態には対応出来ない」

そう2人が話しているところにカズキが口をはさむ。

「仲間を守るために1人で残ろうとするなんて。カナタそっくりだなユーリ」

「なっ………！」

カズキにいわれほほを染めるユーリ

「クロエ向こうは俺に任せろ。いざとなったらあれを使う」

「わかったよ、でも無理はしちやダメだからね？」

「い、いくらなんでも無理ですよっ！カズキ先輩は強いですけど、あの量を1人なんて…」

「誰がひとりっていったんだユーリ」

「そうよ、ミストガンにはカナタがいるじゃない」

「裏切り者の先輩なら真っ先に逃げ出すはずです」

「ユーリ、カナタのこと………信じてあげて」

「……クロエ先輩？」

「カナタは困ってる人を放っておけるような性格じゃないよ」

「そうですね。単純なくらい人の危機になると体が動く人ですから」

「ってことで、お前らここは任せたぞ」

そう言い残しカズキは全速力でミストガンに戻っていった。

クロエとロイドはカズキを見送ったあと魔甲蟲の迎撃戦を展開。

ユーリもそれをサポートするために混戦へと引きずり込まれた。

## 初陣

都市郊外三番区。

もとより人気のない郊外だが、住民が避難したためゴーストタウンのように静まり返っている。

避難誘導任務に就いていたミソラたちが報告する。

「こっちは逃げ遅れた人がいないか確認終わったわよ」

「ふつ、私の持ち回りも完了した。逃げ遅れた人はいない。まったくこんな地味な作業をする羽目になるとは甚だ心外だな」

ドーム付近に位置する郊外はもとより人気のないため、避難も比較的円滑に進んでいたのだが

「俺の方も終わったけど、そっぴやレクティイは？」

カナタたちが捜すとレクティイは猫を抱えて戻ってきた。

「あのう…、カナタさん」

「シエルターまでつれてってやれよ」

「ありがとうございますっ！」

元気よくシエルターへ駆けていくレクティイを見守りながらリコは疑念を抱き尋ねる。

「なぜキミがここにいるんだ？」

「逃げ遅れた人がいないか見回ってるからに決まってるじゃんか」

「そんなことを訊いているのではない。キミの実力をわたしは知っている。元エースならとつとと前線に出撃して、敵を蹂躪してくれればいいだろう」

本当はカナタも今すぐに戦闘に参加したいところなのだが

「俺にもいろいろ事情があるんだよ。裏切り者だからな」

そんなやりとりを見ていたミソラは不審に思っていた。

飄々としていてとらえどころが無いカナタだが、一本芯が通った人物であることを知っているからだ。

なぜ彼は出撃しないのか、もしかしたら出撃できない理由があるのではないか、それはもしかして…。そう考えていると

「あのう、無事に猫ちゃん届けてきました」

「おう、レクテイご苦労さん」

シエルターから戻ってきたレクテイはやけににはにばにばしていた。吊られたカナタも普段の表情に戻る。

「なんだよ？いいことでもあったか？」

「はいっ！猫ちゃんを届けたらシエルターの中にいた人たちに凄く応援されました！」

きつとガーディアンの学生を信じているのだろう。

「そっか。ならその期待に答えてやらなくちやな」

そんな時だった。《ミストガン》直上に飛行警戒中の部隊が急に忙しなくなり、周辺から無数の存在が黒い霧のように立ち込めてきたのは。

耳をつんざくような翅音。それが幾重にも幾重にも積み重なって、大地が唸るような轟音となる。

人を喰らい、屠り、殺し尽くせ。それが魔甲蟲の意思。

その身に宿す力は呪力。人類の理解が及ばない滅びの力。

大空を埋め尽くすように飛翔しながら襲い来る数千の群れ。その群れが存在する一角だけが暗雲が立ちこめているかのように錯覚してしまう。

それらが《ミストガン》を目指す中、その群れを殲滅しつつ《ミストガン》に全速力で戻る存在が一人

「流石に多すぎだろこれ、さっさと戻ってカナタにしらせねーと」

カズキは魔剣を構え全速力で飛翔していく。

彼が通った場所だけが晴れ間のようにポツカリと空いている。

それほどまでの損害を受けても魔甲蟲は真っ直ぐ《ミストガン》へと猛り狂ったかのように襲いかかっていく。

『市街地で避難誘導に十時しているガーディアンの学生は全員戦闘体制を取るように。可能な限りの技能を全て使い、市街地へ降下しつつある魔甲蟲を殲滅しなさい』

有無を言わせぬフロンの声。それだけで差し迫った状況だと理解できる。

避難誘導に当たっていたのはEランク小隊のみ本当は闘わせたくない小隊なのだ。

「いきなり実戦になるつてのは想定外だけど、どうやらFランク小隊にもお呼びがかかったようだな」

「ねえ、これから初出撃なのに士気が下がるじゃない！Fランク小隊つてやめてよ！」

「ふっ、やれやれ。雑魚の相手は性に合わないんだがな」

「が、がんばりますっ！」

それぞれの瞳が覚悟を決めた輝きを放っている。

「市街戦だと建造物があるから気をつけるよ。飛行中に頭ぶついたりしたらやべーからな。後ろは俺が守ってやるよ、教官として危なくなったら必ずフォローに入る。だから普段通り戦ってこい！」

そう告げるとカナタは何も無い空間からホウキとダガーを取り出し悠々と構える。

ミソラたちは巖のようにそびえ立つカナタにこくりと頷いたあと、それぞれが飛行魔術を発動し、魔甲蟲との戦闘に入った。

## 最弱たちの頑張り

市街地で戦鬪を繰り広げるミソラは魔砲剣を構えアルケナル級と対峙していた。

未だ砲撃が満足に出来ないミソラはカナタの教え通り、ギリギリまで引き付けて砲撃を行う。

飛翔を停止し、真っ直ぐに向かってくるアルケナル級に魔砲剣の砲口を向け、魔砲を放った。

手応えはあったが命中判定は不可能。

「ど、どうなったのよ!」

ミソラがこわごわと後ろを振り向くと、彼女と交差したアルケナル級は胴体から体液を噴出しながら力なく市街へ落下していった。

「やっぱ命中率はまだただけど、よくやったじゃんかミソラ」

ホウキに乗るカナタは巧みに魔甲蟲を避けながらミソラの雄姿を褒めたたえた。

ミソラの長所はスタミナと加速力。そしてそれらの根源である魔力。まだ高度な飛行技術や砲撃の命中精度など問題は山積みだし、無闇やたらに砲撃する癖があるが、確率は収束する。つまり数撃ちや当たるのである。

それにミソラは魔砲剣戦技も未熟ながら習得している。

「や、やったあああーっ!!!」

不敵な笑みを浮かべるカナタの視線の先には喜ぶミソラの姿があった。

魔甲蟲を初めて撃墜できたことが余程嬉しいのだろう。

しかし調子に乗ったミソラは迫り来るアルケナル級に砲口を再び向け、魔力をチャージし始めた。チャージ、チャージ、チャージ。ホバリングしたまま、まるでプロキオン級を撃破するかのような魔力を練り上げた。

「げっ、そんなもん街中でぶちかましたら…っ!」

ミソラは魔砲剣戦技ーストライクブラスターを放った。

威力は絶大、アルケナル級を街諸共吹き飛ばした。

それを見てカナタ、リコ、レクティは

「最悪だな」

「最悪だぞ」

「最悪です」

そう言い放つ

「どうしてだれも誤射だつていつてくれないのよ〜っ!」

「街を吹っ飛ばしといて何言ってるんだよ…、ってかお前んちの喫茶店吹っ飛んだけど大丈夫か?」

それを聞いてミソラは、はっと青ざめた。

その後しばらく交戦していると、変異種を討伐せよとの連絡が入ったが。

「なあ、お前らがキメラデネブを倒せよ」

いきなり突拍子もないことをカナタが言うものだから三人とも目を見張り驚いた。

「あ、あたし達ランキング戦でも勝ててないのよ? いきなり変異種なんて…下手すれば死んじゃうかもしれないのよっ!」

「ミソラの言う通りだ、正気の沙汰ではないな」

「そ、そんなの無理です…」

三人が思い浮かべたのは敗北する姿。

彼女立ちにカナタが声をかける。

「死ぬために訓練してるわけじゃないだろ? 生き残って大勢の人々を守るために訓練してるんだ。お前らはキメラデネブを倒せるくらい

強くなったよ。俺が保証してやる。…ん？」

カナタが話しているとカナタの通信結晶が鳴った。

「カズキか、どうした？」

『もし、3人が変異種と戦うなんてことがあったら伝えてくれ。ミソラは小隊長だまだ頼りないところはあるけどちゃんとみんなを見てる。レクテイ、お前は俺の一番弟子だからな？自身を持ってよ。リコ、無理に試合に出させるのに闘わせてごめん？帰ったらマツサージでもしてやるよ。そんで勝ったらみんなでアイスでも食おうぜ、俺の奢りだ。じゃあ俺は戦闘に戻る、またな』

「だってよ？」

「！……っ！？」

二人の教官からのエールに3人は奮い立つ。

「覚悟は決まったみたいだな？空の上では常に警戒、指示は小隊長のミソラが出せよ。俺はお前らを死なせるつもりはねーし、《ミストガン》の市民を殺らせるつもりもねーよ。……お前らならできる。」

3人は今までにないほど自身に満ちた顔で頷いた。



## 最弱と変異種

「そんなじゃ、作戦通りにいくぞ?」

「…いきますっ!」

カナタの掛け声とともにレクティが飛び出す。

魔甲蟲の数はざっと50は超えているだろう。

普通ならばEランク小隊に属する生徒が闘えるはずなどない、しかしレクティ・アイゼナツハ。

アイゼナツハ流魔双剣術の後継者であり、《ミストガン》最強の魔双剣士の教え子である彼女なら可能だ。

レクティが魔甲蟲とすれ違おうと魔甲蟲たちは全身を分断された。

「な、なにをしたのよっ!レクティ!」

「なにつて…ただ斬っただけですけど」

当たり前のことを聞いてくるミソラにレクティは内心首をかしげた。

レクティに近づく魔甲蟲を撃ち落とすはリコ・フラメル、素晴らしい射撃センスで撃墜していく。

「女神な私には当然のことだ」

リコは誇らしげに話している。

ミソラは作戦通りに魔力をチャージ、持ち前の加速力でぐんぐん魔甲蟲を引き離していく。

が、しかし一体の魔甲蟲がミソラに襲いかかった。

魔力をチャージしていたミソラは何も出来ない、彼女が目を瞑った時、強い衝撃が彼女を襲った。

恐る恐る目を開けると血を流したカナタがいた。

「変異種がくるぞ、準備しろよな」

「あ、あんたっ!」

「いったろ?死なせねーって」

ミソラは強く頷いて、もう一度飛び上がる。

そして……………

「あたしたちが《ミストガン》の空戦魔導士よっ！」

そう叫びストライクブラスターを放った。

爆風が辺りを包み込み変異種が姿を消した。

しかしおかしい、魔甲蟲たちが引かないのだ。

「わたしたち勝ったんですか？」

「うむ、そう見えないことも無いが勝ったのか？」

「まあ、負けてはねーな」

「どうゆうことよ？」

「いつてなかったか？変異種はいつたいじゃねーよ」

「二いつてないわよ（です）（ぞ）！！」

彼女たちはカナタの説明を急かした。

「変異種が複数いる!？」

「これだけ魔甲蟲がいるんだ、司令官が一人のわけねーだろ」

「そのう…特に連絡はないです」

「場所がわかんねーんだよな」

「つまり、《ミストガン》の人々を守るにはその司令官の魔甲蟲を倒さねばならぬのだな？」

「ま、そういうことだな。結構追い詰められてるし末期的かもな」  
「ど、どうするのよっ!」

「ふん、仕方がないな。少しばかり本気を出してやるか」  
するとリコは眼鏡をかけた。

「どうして眼鏡なんてかけてるんだよ?」

「ふっ、仕方がなからう。私の千里眼で見つけてやる」

そういうとリコは搜索を開始した。

「カズキが言つてた通り眼鏡かけても美人だな」

「なっ?!まあ…それほどでもあるか」

それからしばらくして

「見つけたぞ、数は一体だがかなり離れている。それにかかなり大きいぞ、キメラデネブとは比べられん」

「そいつは、キメラアンタレスだな。知能がずは抜けて高いらしい、俺もお目にかかるのは初めてだけどな。まあ俺が何とかする」

「そんな大きいのをあんたひとりでやるの!?!」

「ああ、そうだけど」

「無理に決まってるじゃないのっ!」

「全然無理じゃねーよ、お前らが頑張つて変異種を倒したんだ、俺ががんばらないでどうすんだよ」

「ミソラ、それに彼はひとりではないぞ」

「へっ?」

「リコさん?」

3人の視線の先には頬を染め女神のように微笑むリコがいた。

「どうしたんだリコ、そんなににやけて」

「っ?!にやけてなどいないっ!彼が、カズキが交戦を始めた」

「んじやいそがねーとな」

カナタがいこうとすると

「「私たちもいくっ!（いききますっ!）（いくぞ!）」」

「じゃあしっかり捕まってるよ?」

そう言つてカナタは三人をホウキに乗せスピードを上げた。

## 小隊集合

《ミストガン》付近の空域

「数が多すぎやしないか!？」

愛剣のジノビオスを片手に奮闘するカズキの姿があった。

文句を言いながらも極力魔甲蟲を《ミストガン》に近づけないよう闘っている。

そんな彼の元に昔からの相棒と可愛い3人の生徒がやってきた。

「カズキまたせたな」

「おっそいよカナタ!…ってなんで3人はへろへろなの?」

「いや、ちよつと飛ばしすぎちまつて」

「速すぎよお…」

「き、気持ち悪いですう…」

「め、女神な私でもあれは耐えられん…」

生徒たち3人はカナタのハウキのスピードに耐えきれずグロツキー状態になっている。

「まあ、こいつらのことはさておき。カズキ、あれが敵さんの司令官か?」

「そうみたいだね、俺もあまりの大きさに吃驚させられたよ」

2人が眼前に捉えるのは積乱雲と見間違えるほどに大きな黒い雲海、しかしそれはキメラ・アンタレス。

今回彼らが仕留めなければならぬ人類の敵である。

「とりあえず俺らで殺るしかねーよな」

「なにいつてんのカナタ?」

「なについて、今戦えるのは俺らだけだろ?」

「いや、俺だけじゃん。その傷で戦わせるとでも?」

「その傷つてもしかしてっ…!」

ミソラはカナタが自分を庇って負傷したを気に止む

「こんくらい余裕だぜ?」

「だめだ、あの時はカナタを置いて俺らは退いた。その結果カナタは負傷した。同じ前衛であり相棒だった俺は悔しかったからね、今度は

カナタが見ててよ」

そういつてカズキは魔弓を取り出しカナタに向ける。

「か、カズキさんっ!？」

レクテイが驚きの声を上げる

「アニマ、カナタの傷を癒してくれ」

そういつてカズキが矢を放つとカナタの傷を光が包み込んだ。

「なんかわりーなカズキ」

「傷が癒えるまではカナタも3人と一緒に待機、これは教官命令だよ」

カズキは魔力を練り上げ4人の周囲に結界を張った。

「しかたねーな、わかったよ」

「カナタが素直で助かるよ」

「あんた1人じゃあんな大きい無理に決まってるわよ!」

「ミソラはちよつとは俺のこと信じてよ…」

「あ、あのう…カズキさんっ!」

「レクテイ?」

「わ、わたしっ!信じてますからっ!絶対無事に帰ってきてくださいねっ!」

「任せとけて」

「ふむ、君ならできるだろう。実力、見せてもらおうぞ」

「女神様に言われたとあつちや頑張らなくちゃな」

カズキは全員と言葉を交わした後

「それじゃあいつてくる」

一言だけ残し、飛び去っていった。

「あいつは大丈夫なの!？」

「まあ傷が癒えたら俺も加勢するしな、それに…」

「それに?」

「あいつの本気なんて滅多にみられないぜ?」

ミソラの問いかけにカナタはワクワクした表情で答えた。

## カズキの実力

「さーてカナタにあんなこと言っちゃったし、少しはちゃんとやらなきゃね」

黒き巨塔の如く立ちふさがるキメラ・アンタレスにカズキはひとりで対峙していた。

「あのお…カナタさん」

「どうしたレクテイ？」

「なんでカズキさんは武器を持ってないんですか？」

「ああ、あいつは多分リミットスキルを使うはずだ」

「リミットスキルですか？」

「レクテイ、リミットスキルとは己の身体への負荷が恐ろしい反面とてつもない能力を発揮するものだ」

「リコさんはものしりですねっ！…って負荷がすごいってカズキさんは…だ、大丈夫なんですかっ!？」

「まあ、大丈夫じゃね？」

「久しぶりにやるから加減がわかんないなー、まあいざとなったらカナタにまかせればいいか」

そう言い放つとカズキの雰囲気が一変する。

「常闇より現れよ…漆黒の亡霊たち我が元へ並び立てっ!!」

すると突如カズキの周囲に漆黒の鎧を身にまとった騎士たちが数え切れないほど現れた。

さらにカズキの左手にはまるで幻のような黒き大剣が握られていた。

「殲滅せよ！」

カズキの号令と共に騎士たちが魔甲蟲に一齐に襲いかかる。一体、また一体とアルケナル級が撃墜されていく。僅か数分のことだった。

あたりを多い尽くしていた黒い影は魔甲蟲からカズキが生み出した騎士団に変わっていた。

「相変わらずとんでもねーよあいつは」

カナタはいいものを見れたと愉しそうにしている。

「ねえ！あれは何なのよっ！」

「わ、私も知りたいですっ！」

「実に興味深いぞ」

生徒たち3人はカズキの戦いに興味津々だ。

「言ってなかったか？あいつのリミットスキル《幻影の騎士団》そしてあいつの本当の武器《殲滅する剣》ブラスター・ダークだ。あいつ滅多に使わないんだけどな」

「…っ！」

3人は自分たちの教官の実力を目の前に固まっている。

少し経ち、リコが口を開いた。

「しかし彼は未だに1度も刃を振っていないぞ？」

「まあ、あいつなりの手加減なんじゃねーの？」

「ふえっ？カナタさんどういことですか？」

カナタの言葉の真意がわからずレクティは問いかける。

「言葉の通りだって、あいつが剣を振ったら…」

そうカナタが言いかけた時…

「「きゃっ!」」

「うおっ!?!」

4人を包み込む結界が大きく揺れた。

そしてその後に残った後継に3人は驚いた。

「相変わらずいい景色になるもんだ」

「こ、これって…」

「す、すっすぎますっ…」

「こ、これが彼の本気か…」

そこにあつたのは雲一つない空

「んじゃそろそろ俺も行くかな」

そう言うときカナタはグラディウスを召喚し結界から出てカズキの元へ

「遅かったね？カナタ」

「お前の本気を生徒たちに解説してたんだよ」

「それはご苦労さまです」

「気持ちが籠ってねーなおい…まあいいや俺も本気で行ってやるよ」

そういつてカナタが目を瞑るとキメラ・アンタレスから

再びアルケナル級が無数に現れる。

しかしどのアルケナル級もは翅音のトーンが一つ低い。

ミソラたちはその異変に首をかしげた。

カナタは呼吸を整えて全てを空にする。

万物の流れを無意識に感じ、潜在的な意識の中でふたつのチカラを意識する。

ひとつは魔力。もうひとつは呪力。

人間のチカラ。人外のチカラ。

纏め、練り上げ、捏ね練り回し、収斂させる。

カナタの体内の奥底で、黒いうねりの様なものが生じる。

そしてそれらすべてが混ざり合い次第に一体化したチカラが生じる。

生み出されたのは《崩力》

本来合わさることない相反するチカラの合成物であり、未だその存在が証明されていない世界の理を破壊する叛逆のチカラ。

クロエを庇って魔甲蟲の体内に取り込まれかけたカナタに芽生えたジョーカー。



「なんだかわかんないけど今のカナタは最高に頼もしいよ」

「俺はいつだって頼もしいだろ？」

「ははっ、違ういや」

「さあ、決着をつけようぜ」

「ああ、全力で行こう！」

これまでとは雰囲気が圧倒的に違う自分たちの教官の姿に困惑しつつ、ミソラたちは2人の戦いぶりに目を向けるのだった。

## 少女たちは何を見る

カナタの雰囲気が変わった。

それはまだ未熟な3人であっても容易にわかることだった。

「ねえ2人とも」

「なんですかミソラさん？」

「ふむ、どうしたというのだ？」

「ここから先の戦い…。絶対見逃しちやいけないと思う」

「そうですねっ！ 私たちの教官さんの本気ですからっ！」

「奇遇だな、私のそう思っていたところだ」

3人が話していると彼女たちの教官2人から声がかかった。

「ここから先は悪い戦い方の見本みたいなものだ。絶対真似すんじゃないぞ？」

「絶対そこから動かないようにな。」

3人は息を呑む。

そして次の瞬間…

彼女たちの教官の戦いが始まった。

「カナタは真っ直ぐ飛んでくれ。道は俺が切り拓く」

「ああ、わかった。任せませ」

「それじゃあいこう」

その言葉を合図にカナタは全速力でキメラ・アンタレスへ飛んでいく。

「とりあえず雑魚どもにはもう1回退場願おうか。」

カズキがブラスター・ダークを一振りするとカナタの前にいたアルケナル級が全てを消滅した。

キメラ・アンタレスにも剣戟は届いたようだが、あまり効果はないようだった。

その光景を見た3人は

「て、敵がいなくなっちゃいましたっ!」

「で、でもなんであんなのを喰らってもあのデカイのはピンピンしてるのよっ!」

「ふむ…」

レクティとミソラが声を上げる中リコはなにやら怪訝そうにしている。

一方カナタはカズキが拓いた道を進みキメラ・アンタレスへとたどり着いた。

カナタの接近にキメラ・アンタレスは至るところに設けられた赤い眼から、大小合わせて二十数本の光線をカナタへと掃射する。

目視してからでは確実に被弾してしまうそれを、カナタは平然と掻い潜り大空に浮かぶ鋼の城砦のような巨軀を飛び回る。

カズキの一撃を持ってしても傷つけることが出来なかった、キメラ・アンタレスの甲皮を舐めるように飛ぶカナタの軌跡には、ありうる筈のない緑の液体が飛び散っていた。

3人は目を疑った。

何故なら、カナタの左腕より先が一瞬消えたように見えたからだ。

「あ、あれって…」

ミソラが困惑していると

「あれもリミットスキル、《黒の剣聖》と呼ばれたカナタ・エイジの閃光剣だ」

ミソラはリコの話に感心しつつもカナタの表情に不安を抱く。

彼の戦いぶりにはとてつもないが、彼は顔面蒼白。唇まで真っ青でいかにも調子が悪そうだ。

遅せーな。

カナタはそんなことを思いながら自分へ向けて放たれる光線を躲していた。

それがやけにスローモーションに映る。

グラディウスを片手にカナタは閃光剣で攻撃を続ける。

「そろそろ終わりにしなくちゃな」

そういつてカナタはさらに速度を上げていく。

キメラ・アンタレスはあまりの戦力の差に後退を始める。

そこでカナタは気付く。

いや：俺が速ーのか？

すると突然カナタが咳き込んだ。

口からは鮮血、体が崩力についていけず限界が近いようだ。

カナタは勝負を着けようとグラディウスに魔力を注ぎ込む。

「わりーけど…。俺には守らなくちゃなんねーもんがあるんだよ」

カナタは魔砲を放つモーシヨンに入る。

その時ミソラが声を上げる。

「あいつに魔砲なんて効かないわよっ！さつき見たでしょ!」

「ミソラ、それは間違いだ」

「えっ?」

魔砲を放とうとするカナタの元へカズキがやってくる。

「カズキ、遅かったじゃねーか」

「カナタ1人でも勝てそうだったからな」

「じゃあなんで来たんだ?」

「俺達は二人揃ってロイヤルガードのエースだろ?」

「そうだったな。そんじゃあいくぜ!」

そんな2人にキメラ・アンタレスは光線を放つ。

「あ、あんたたちにげなさいよっ!」

「ミソラ、大丈夫だ」

リコが焦るミソラを諭す。

「で、でもっ!」

ミソラが抗議しようとしたとき…

「なあ、言っただけじゃなかったか?」

「えっ?」

ミソラは2人に再び目を向けると驚愕する。

「俺達が本気を出した時点で勝利は決まってるんだよっ!」

カナタが声を上げるとグラディウスから魔砲が放たれる。

魔砲剣戦技ーストライクブラスター

ストライクブラスターはキメラ・アンタレスの光線を全てを弾き飛ばし被弾する。

そして、その上から…

「それってつまりは、俺達の勝ちってことだろ？」

大空を覆い尽くす程の魔力が注ぎ込まれた、ブラスター・ダークを構えたカズキがキメラ・アンタレスへと振り下ろす。

幻影剣戦技ートリーズンデイスチャージ

「とっとと消えろよ、ここは俺達の空だっ!!」

2人の攻撃を受けキメラ・アンタレスが爆発する。

爆風に巻き込まれ2人の姿も確認することは出来ない。

3人は急いで2人の安否を確認する。

3人が見たのはチカラを使い果たして自由落下している2人の姿。

3人は残っているチカラを振り絞って2人を支える。

「あんたたち大丈夫っ!？」

「おふたりとも大丈夫ですかっ!？」

「女神な私が心配しているのだ、大丈夫だろうなっ!？」

「お前ら大丈夫か？」

先に声を出したのはカナタだった。

「何がよ？」

「怪我とかしなかったか？」

青ざめた表情を見ればどちらが具合が悪いのかは一目瞭然だ。

「カナタさんの方が怪我が酷いですっ!」

「それってつまり、お前らは無事なんだな？」

カズキも3人に声をかける。

「君たちの戦闘に比べれば大したことはないっ!それより君は大丈夫なのか!？」

いつもは冷静なりコが声を荒らげる。

「ちよつとした魔力の使いすぎだ。すぐに良くな…」

「か、カズキ!」

「カズキさんっ！」

リコとレクティがカズキが意識を手放したことを心配して焦る中  
「どうしてあんなチカラを隠してたのよ…!？」

ミソラはカナタの謎の力について問い詰めていたが、既に意識を手放していたカナタが答えることは無かった。

## 訓練の成果と新たな戦い

訓練グラウンド。延期されたミソラたちのランキング戦当日。

自分の教え子たちの戦いを見届けるため、ギプスで腕を固定した状態のカナタがそこにいた。

「どうしたんだよユーリ？」

そんなカナタの隣の席にユーリが腰をかけた。

「先輩たちの生徒がどんな子たちなのか見極めようと思いましたが」

「なんかあったのか？いつもより機嫌がいい気がするけど」

「気のせいでしょう。そういえばカナタ先輩はあの事件の時は避難誘導してたんですよ？なんでそんな怪我をしてるんですか？」

「さーな、逃げる途中でコケたんじゃねーの」

2人が話しているとクロエとロイドもやってきて。

ロイヤルガードの4人で観戦することになった。

なぜカズキがないかという点、ミソラが街を破壊したことの始末書を書かされているからである。

ランキング戦が始まったのだが、ミソラがリコを罵り、リコがそれ的確に反論し、レクテイがおどおどしていかにもチームワークがない小隊に見える。

「…カナタ先輩。これのどこが強くなつたんですか」

「ま、まあ…そんなこともあるんじゃないか？」

3人を見て苦笑するカナタとそれを見て微笑むクロエ、やれやれと言った様子のロイドと疑惑の目を向けるユーリ。

4人が観戦していると勝負がついた。

もちろんミソラたちE-601小隊の敗北。

カナタは敗北を喫した彼女たちにどんな言葉をかけようかと思いついて悩んでいた。

数日後、クロエとユーリはガーディアンリーダーに呼び出されていた。

「カナタ・エイジとカズキ・アルカラスの小隊はまた負けたようね」

「はい、第1クォーターは全敗です」

「そう、それである事件のことだけどカズキ・アルカラスによるキメラ・アンタレスの単独撃破でいいのよね？」

「ええ…カナタがそう言ってますから」

「そう、そこでね。《ミストガン》の英雄カズキ・アルカラスには特務小隊の任務を優先させるために教官役を辞めてもらおうと思ってね」  
「それでどうなさるおつもりで？」

「後任にユーリ・フロストルを据えようと思うのだけど…」

「わ、わたしですかっ!？」

「ええ、あなたこの前、教官をやりたいと申請していたじゃないの」

「そ、それには理由が…」

「まあいいわ、とりあえずあの2人を呼び出して頂戴」

「わかりました、私が責任をもって連れてきます」

クロエは返事をした後、ユーリと共に空戦魔導士科長室を後にする。

「ねえユーリ、どうしよつか…」

「カナタ先輩のことだからカズキ先輩を引き止めるために、何かしますよね…」

2人はため息混じりに言いながらカナタとカズキを呼び出すために、空へと向かっていった。



## クビを賭ける少女達

「それってつまり、俺がクビってことか…?」

「ええ、そういうことよ」

空戦魔導士科長室に呼び出されたカナタとカズキはガーディアンリーダーが放った言葉に驚いた。

「なあ、理由聞かせてくれよ」

『《ミストガン》の英雄を第1クォーター全敗の弱小小隊の教官につけるには惜しいわ』

「とは言ってもな。カズキを辞めさせるわけにはいかねーよ、あいつらにはコイツが必要だ」

「どうであれ結果の出せない小隊にはつけられないわ」

「じゃあ結果を出せばいいんだろ?」

「なんですって?」

カナタとガーディアンリーダーが激しい言い争いをする。

「カズキの後任は誰にする予定なんだ?」

「ユーリ・フロストルよ」

「じゃあEー601小隊がユーリの率いる小隊に模擬試合で勝ったらどうする?」

「ち、ちよつとカナタ?」

カナタの発言にクロエが思わず聞き返す。

「なんかおかしいこといったか?」

「わかったわ…ではユーリ・フロストル率いるAー227小隊とで模擬試合をやりましょう。Eー601小隊が敗北すればカズキ・アルカラスは教官を辞任し後任にユーリ・フロストルがつく。これでいいわね?」

「いやダメだ。俺達が勝ったらカズキには残ってもらおう。あとはそうだなユーリにはうちの隊員になってもらおうかな」

「か、カナタ先輩!」

「なんだユーリ?」

「そんなの理不尽ですっ!」

「なんだよ？負けなければいいだけだろ？」

「ーっ！。わかりました、その勝負受けましょう」

「いいの？ユーリ」

「クロエ先輩、カナタ先輩の言う通り負けなければいいんです」

「では話はここまでね。一週間後に模擬試合を行うわ、準備をしておくように。もう戻っていいわよ」

そう言われ4人は空戦魔導士科長室を後にする。

カナタとカズキはミソラたちが待機している小隊室に向け足を進めた。

「カズキ（さん）がクビになる!?!」

「うん、そう言われた（▽、\*ヾ）テヘツ」

「笑い事じゃないわよっ！」

「ふむ、あの女は何を考えているのだ」

「いやですっ！絶対いやですっ！カズキさんは私たちの教官さんですっ！」

「まあ、待って。まだ話は終わってねーよ」

「あのね？ユーリが率いるAランク小隊に勝てば俺は残れるんだ」

「まあ、勝ちやいーってことだな」

「Aランクに勝って!?!あたしたちはまだ勝ったことないのよ!?!」

「そうですよっ！無理に決まっていますっ！」

「ふむ、しかし勝たなければカズキを失うのだろうか？」

「…っ」

反論していたミソラとレクティもリコの言葉に黙ってしまふ。

「まあ、そういうことだ。明日からは新しい訓練をやるからな。あ、ちなみにカズキは模擬試合が終わるまでは教官の仕事は休みな」

「えっ、なんで？」

「俺達が絶対にお前をここに残らせる。俺らを信じろよな？」

「素直に従うよ…でも何かしらさせてくれよな？」

「もちろんそのつもりだ、明日からの訓練に合格したやつは俺かカズキに褒美を要求できるってことで」

「ほ、ほんとに!?!」

ミソラたちが席から立ち上がる。

「俺が景品みたいじゃんか…」

「実際今回の模擬試合はそうだろう？」

「うっ…そうだった」

「てなわけで今日は解散だ。明日から覚悟しとけよ？」

カナタの言葉を最後に今日の小隊活動は終了した。

## カナタとユーリの出会い

「あー、嫌なところだった」

「ほんとにね。ユーリ大丈夫？」

「あ、はい…大丈夫です…」

カズキたち特務小隊はガーディアンリーダーに連れられて研究所まで来ていたが、そこで行われていた実験があまりに酷いもので心が病んでいた。

「それにしてもあのリアルってやつという言葉が気になったな」

「カズキ？」

「いやさ？研究所出る時にユーリが自分より強い人にしか興味がないとかなんとか」

「あー、『月刊・ガーディアン』の話だね。あれはまあカナタのことだから」

「だと思った」

「クロエ先輩にカズキ先輩も、何言ってるんですか！」

「わたしはホントのこと言っただけだよ？」

「ユーリはカナタのことになるとすぐ顔に出るからなー」

「なっ…」

「そういえばカナタとユーリがあっただのって新入生歓迎会のランクフリーマッチの時なんだよね？」

「ああ、カナタがユーリをナンパしてたんだよ」

「あら、カナタも隅におけないね」

「あのっ！2人もっ！」

そう、カナタとユーリの出会いは劇的なものだった。

新入生歓迎会のランクフリーマッチ。

既に他の小隊からスカウトを受けていたユーリは暇つぶし程度に見ていたのだった。

しかしユーリの目に映ったのはどんな逆境でも諦めないカナタの姿。

敵の攻撃を耐えて耐えてずっと反撃の好機を伺っている。

そしてカナタが反撃に出る。

背後からの攻撃をまるで後ろに目がついているかのように受け止め、当時はまだ未完成だったものの閃光剣で敵の武器をはじき飛ばし気絶させる。

勢いがついた敵の武器がユーリの元へ飛んでくると。

「させるかよっ!」

カナタが急降下して助けてくれた。

「あぶねーあぶねー。大丈夫だったか?」

いかにもボロボロでかつこい姿ではないが、カナタのギラギラとした瞳にユーリは心を奪われた。

その後カナタたちの小隊が勝利しカナタがユーリの元へ再び降りてきた。

「怪我はしてないよな?」

「先程は、どうもありがとうございましたっ!」

「そんなに畏まるなって。もともとは俺がわりーんだしな」

「どうお礼をしたらいいか…」

「かたっ苦しい礼儀とかはなしだ。俺らはこれからも同じガーディアンだろ?」

その時カナタの仲間らしき人物が声をかけてきた。

「おーいカナタ、ナンパか? 次の試合の準備があるんだから早く戻れよー? クロエ怖いんだから」

「げっ、クロエはそういうの厳しいからな。わりーわりーすぐ戻る。

そんじや新入生、おさらばだ」

「で、でもお礼をしないと私の気がおさまりませんっ!」

「律儀なやつだなー、お前は。よしだったら俺らと同じ空に来いよ！俺たちの背中を任せられるやつ、誰かを守るために戦うやつは大歓迎だぜ」

その後ユーリはもともとのオフアーを断つてカナタたちの小隊に  
はいった。

## 不穏な事件と新たな特訓

「昨日は嫌なものをみたね」

「ええ、あまりいい気はしませんでした」

クロエとユーリは昨日の出来事を振り返りつつ。

「それで傷害事件のことなんだけど」

最近起きている事件について話している。

しかしユーリは気の抜けた返事しかしていない。

そこへ…

「最近物騒なことが起きてんだな」

「よー、2人とも」

「事件のお話ですか？」

カナタ、カズキ、ロイドの3人がやってきた。

「なぜカナタ先輩がここに!？」

「カズキに始末書任せちゃったからな。奢りだよ」

「それに僕も便乗したわけです」

「ロイドにも迷惑かけてっからな」

「いやー、カナタのおかげで元気でたよー」

3人は和気あいあいと話している。

ほんとうに仲がいいとわかるだろう。

「そういえばカナタ先輩。A-227小隊の教官に赴任しました。覚

悟しておいてください」

「あーいいいぜ、どうせ俺が勝つけどな」

「コテンパンにしてやりますから!失礼しますっ!」

「ロイド、頼めるか？」

「奢ってもらいましたからね」

そういつてロイドはユーリを追いかけていく。

「もー、あんまりユーリをいじめちゃダメだよ」

「あれでいいんだよ。ユーリに悩み事は似合わねーって」

「カナタとユーリはずっと一緒にいたもんな」

カナタとユーリの関係は先輩と後輩。

しかし生涯連れ添った伴侶のようにわかりあっている。

「んじや俺は特訓行ってくるわ」

「レクティたちによろしく言っといてくれ」

「あ、カズキ。お前はあとで小隊室にいてくれよ」

「なんで？」

「お前はリコのご褒美になるだろーよ」

「そうなの？」

「まーそーゆーこった」

カナタはその場をあとにした。

「今日からの訓練はポジションはくじ引きで決定。演習E4に挑戦だ。确实仲間に指示を出していいからな」

「なんでそんなことをするのよっ！」

「仲間をよく見て動けっことだ。んじや頑張れよ」

《ミストガン》 上空高度4000第3訓練空域。

『ふむ、こういうものか』

中衛となったりリコは、腕を組み前後を見ていた。



アルケナル級のダミーはやすやすとミソラの前衛をとつぱする。

リコも眺めているのみなので後衛のレクティが慌てて迎撃するのだが。

「やれやれ、タチの悪い特訓だな」

「なんでだよ」

「この特訓を終えたあと、わたしは2人を認めざるを得ない」

『なあミソラきこえるか?』

『なによっ?』

『キミの左翼から接近する集団を足止めしてくれ』

『なんであんな遠くのやつを殲滅するのよ?』

『キミにしかできないことだ、レクティでは力不足だからな』

『えっ! そうなの!?!』

『だから頼めるか?』

『そ、そこまでいうならやってやるわよっ!』

リコに頼られたのが嬉しいのかミソラは上機嫌で殲滅に向かう。

リコはニヤリと笑った後通信結晶をレクティと秘匿回線に切り替えた。

『レクティ、嘘とはいえ力不足といった済まなかったな』

『えっ? 嘘だったんですかっ!?!』

『もちろんだ、ミソラを持ち上げるためにな』

リコはその頭脳と巧みな二枚舌を駆使してこの演習を乗り切った。

慣れないポジションであったのにも関わらずだ。

「なかなかやるじゃんか」

カナタは不敵に微笑みそういった。

「今日の合格者はリコだけだ。リコは小隊室にいけよ」

「なぜだ？」

「カズキに褒美を頼むんだろ？待たせてあるぜ」

「なっ……。ふん、待たせているのなら行かないわけにはいかないな」

リコは頬を染めながら歩いていく。

空中に残されたミソラとレクティはカナタから指示を受け待機している。

## 実力差とご褒美

「そろそろくるんじゃないかなーかな」

「カナタさん…?」

「何をしたいのよっ!」

カナタはリコに動かされてフラフラのミソラとレクティを残らせた理由をまだ話していない。

「まー見てろって」

そうカナタが言うと、隣の訓練空域でA―227小隊が訓練をしていた。

ミソラたちが相手していたダミーの倍の量をやすやすと殲滅する。

その戦いは洗練されていて全く無駄がなかった。

「ねえ、あんな人たちにほんとに勝てるの?」

「わたしたち大丈夫なんですか…?」

「何言ってるんだよ。今の特訓はあいつらに勝つための特訓じゃないか。勝てるに決まってる、でもそれはお前らがちゃんと気付いたらの話だ」

そう言い残しカナタは地上に降下していった。

一方その頃小隊室では

「リコのご褒美ってことは、あいつが合格するってカナタはわかってたんだろーな」

カズキは1人小隊室で合格者の登場を待っている。

「でもまあ、リコなら1回で合格してもおかしくないか」

カズキがいろいろなことを考えていると。

ガラガラツと扉が開く音がする。

カズキが視線を扉へ向けると：

「待たせてすまなかつたな」

「何言ってるんだよ、合格おめでとう」

カナタの予言通りリコがそこにはいた。

「ふむ、あの特訓はなかなかのものであったぞ。それで褒美なのだが場所を移そう」

「カナタの特訓だもんな。いいよ、どこにいけばいい？」

「ついてきてくれ」

リコに誘われるままカズキはついていく。

行き先は告げられていないがリコを信頼しているカズキは何も言わない。

「ここだ」

「ここってことはマッサージ？」

「そういうことだ、女神な私に触れることを許そう」

カズキが連れてこられたのは更衣棟のマッサージ室。

リコは入るとワイシャツ姿になり、診療用のベッドにうつ伏せになる。

「どこからやればいい？」

「先ずは足から頼む、むくんでしまうからな」

カズキはリコのしなやかで美しい足に手をかける。

訓練で疲れているのだろうと丁寧にもんでいく。

もみもみもみ。凝り固まった筋肉をほぐす。

マッサージで上機嫌になったリコが話し始めた。

「こういうのも悪くないな」

「ん？どうかしたか？」

「特務小隊のエースをこき使うのも悪くないと言うことだ」

「まあ、ご褒美だからな。それに女神様に触れられるなんて、ご利益ありそうだよ」

カズキはそう笑ってマッサージを続ける。

「今日の訓練でな。ミソラにこんなことを言われた。『がーつと動き

「回って敵の注意を惹きつけたらいいじゃないっ!」とな

「ミソラらしいけどリコは後衛だから動かなくていいんじゃない?」

「今はポジションを変えていてな、中衛なんだ」

「あー、その特訓俺もやったよ」

「む、そうなのか?」

「特務小隊って言われたって最初はDランク小隊だったんだよ。」

カズキは話を続けながらマッサージする手を足から腰へ動かした。肘を垂直にぐりぐりと当てて筋肉をほぐす。

「やつぱり強くなるには仲間のことをよく知らなきゃいけないし、認めなきゃいけない。それにこの特訓はぴったりだろ?」

「んっ…。そうだな、私も少し彼女たちへの認識を変えねばならない」

リコはマッサージに甘い吐息を漏らしながらも話し続ける。

「そうだな、みんな頑張ってるよ」

リコの言葉に機嫌を良くしたカズキはリコを仰向けにして、さらにマッサージを続ける。

「んっ…あつ…。な、なんだ?そんなに私の顔を見て?」

「いや、リコはいい女だなって思ったただだよ」

「ああ、この顔のことか。褒められ慣れているからなんとも……」

「容姿のことじゃないって。性格だよ。リコはさ、あの3人の中で一番仲間想いなんじゃないか?相手のことをよく観察してるってことは気にかけてるってことだろ?」

「むっ、わたしをおちよくってるのか?」

「おちよくってなんかなくて。リコみたいに相手をよく見て、適切な判断ができる女は絶対周りから好かれるよ。あとはほかの2人がリコのいいところに気づくといいんだけど」

「…本気か?」

「ああ、本気だよ」

自分を見つめるカズキの嘘偽りなく真っ直ぐな瞳に、リコの造形美の極致のような顔が赤く染まる。

「ふ、ふんっ!そんなことを言っても惚れてやらないぞっ!」

「いや、別に惚れるとは言っていないけど」

「そ、そうか…。そういえば、そうだったな」  
ふむ、どうも彼といるとペースが乱れるな。  
どこかしゅんとしたリコをカズキはマッサージし続けた。

## カナタの思いとユーリの想い

ミソラたちとの訓練を終えたカナタは教室を訪れていた。

「なあクロエ」

「あ、カナタ。珍しいねこんな時間に教室にくるなんて」

「まあな。この前話してた事件って、近接武器を使う奴が狙われてるんだろ?」

「そういえばカナタたちが面倒を見てる小隊にもいるんだっけ」

「ああ、レクテイが狙われたらやばいからな。二つの意味で」

「二つの意味で?」

「ああ、もちろん小隊の活動に支障が出るってのもあるけどよ。問題はあいつだろ…」

「えーっと、カズキのことかな?」

「ああ、あいつはレクテイのことを特にかわいがってるからな」

「そうなの?」

「同じ魔双剣士として繋がるものがあるんだろ?」

はあ…とクロエはため息をついた。

「カナタ先輩」

「ん?ユーリか」

「お話があるのでお時間を頂けますか?」

「ちようど俺も話したいことがあったんだよ」

「では、いきましよう」

ユーリがカナタを連れていくのを見てクロエは

「ふふっ、あれってデート見たいね」

そういつて微笑んでいた。

「あ、あれって相手の教官じゃない!?もしかして籠絡されてる!？」

「そ、そうなんでしようかつ？」

「ふむ、2人は男女の仲なのか？」

「あれってデートだよな？」

「ちよ、あんたたちなんでここにいんのよ!？」

「リコさんからお茶のお誘いがありました…」

「私は褒美をつかって彼に奢らせるのだ。そしてカフェに向かう途中、教官をストーキングしているミソラを見つけたわけだ」

「俺はまあ、財布みたいな感じだ」

「あんたも大変なのね…」

「いいんだよ皆頑張ってるんだから。あいつらカフェに入ったぞ!リコ、レクテイ突撃だ!」

「はいっ!」

「それも悪くないな」

「ちよ、まちなさいよっ!」

カナタたちに続いてカフェに入っていた。

「それでユーリの話ってなんだ？」

「カナタ先輩、カズキ先輩もですけど。今すぐ教官をやめてください」「なんでだ？」

「お2人ほどの空戦魔導士が教官を務めていても、Aランク小队には



勝てませんよ。悲惨な結果になる前に辞めてください」

「大丈夫だって、あいつらは負けねーよ。あいつらはまだ雛鳥かもしれねーけどさ？いつかは大空を羽ばたける日が来るって信じるんだよ」

「そ、そうですか…」

「そんで俺の話なんだけどさ」

「はい、なんでしよう？」

「月刊・ガーディアンの話だけど。お前恥ずかしくないのか？」

「はい？」

「だってお前自分より強いやつが好きなんだろう？」

「ああそれですか…／＼／＼」

「それって《寂滅姫》のクロエのことだろ？」

「え、ええ!?!」

ユーリとしてはカナタのことを言っただつもりなのだが当の本人は気づいていないようだ。

「自分が同性愛者なんで公言しなくても…」

「もういいです!!」

「おいユーリ！俺は心配して」

「知りませんっ！」

立ち去るユーリをカナタが追いかけて行く。

一方その頃

「これ美味しいですう〜！」

「ふむ、悪くないな」

「凄いわね…これ」

「口にあっただみたいで良かったよ」

生徒たち3人はカズキの奢りでケーキを食べていた。

そのカズキはというと

「カズキさんはコーヒーだけなんですか？」

「え？ああ、レクティイたちが美味しそうに食べてるのを見るだけでいいんだよ」

そういつてカズキはレクティイの頭を撫でる。

「あああう……。恥ずかしいですよお：／／／」

「む、それよりも彼らは男女の仲なのか？」

「ああ、そんなことないぞ？まあ俺には付き合ってるようにしか見え  
ないけどな」

「うー……」

ミソラが呻き声をあげているが誰も気にしない。

「それじゃ、そろそろ行こうか明日からも訓練頑張れよ？」

「はいっ！」

「私は合格したがな」

「わかってるわよっ！」

「そりゃよかったよ。聞きたいことがあったら言ってくれ」

こうして4人のストーキング？が幕を閉じた。



ジャージに着替えて、澄んだ空気の外へと走り出す。  
やがて舗装された道の周囲に緑が姿を現し始めた。

訓練グラウンドを囲う森の中はカズキのお気に入りコースであつた。

「あ、あのう…おはようございますっ！カズキさんっ！」

「ん？レクテイじゃんか。もしかして俺のペースに合わせたの？」

後ろから声をかけられ振り向くと、駆け寄ってくるレクテイの姿。体に密着するインナースーツの上から、白いシャツを纏っている。

「俺のペースに誰かがついてきてると思つたらレクテイだったのか。でもわざわざ声をかけてくるなんて珍しいな？何か様でもあるのか？」

「…は、はいっ！そのう…ト、トレーニング中にすみませんっ！」

「もしかしてミソラが来て寮に居づらくなつたか？」

「そ、そんなことは…ありませんっ！」

戦闘で家を吹き飛ばした親不孝娘は現在居候の身だ。

「じゃあどこか怪我でもしたのか？」

吐息が触れ合うほど近くへカズキの顔が迫る。

レクテイは恥ずかしそうに顔をそらした。

「あ、あのですねっ！相談がありましたっ！」

「そうなのか？じゃあどこかで座りながら話そう」

「は、はいっ！」

「それで？相談って何なんだ？」

「特訓のことはご存知ですよね？」

「ああ、リコから聞いてるし、俺もやったことあるしな」

芝生に腰を下ろした2人は話し始める。

「以前ですねっ！カナタさんがミソラさんをコンバートさせようとしたんですよ。その時みたいポジションを増やすのかなって…」

「それで？レクティはどう思ったんだ？」

「はいっ…。前衛を2人に増やすとしても、ミソラさんでは厳しいですし…。私が後衛をやるとしても、魔双剣ではサポートにも限りがあります…。だ、だからその…これじゃ強くなれないんじゃないでしょうか？」

教官を批判していると感じているのか、言葉にところどころ申し訳なさを感じている。

「レクティはみんなのことをよく見てるんだな。よしよし」

へこんでいるレクティを励ますかのように、カズキは彼女の前髪を撫でてやる。

「あああう…カ、カズキさんっ！」

途端に恥ずかしさ半分嬉しき半分の声を漏らすレクティ。

「今から言うことは独り言だから俺が言ったことは秘密な？」

「は、はいっ！」

カズキはレクティを撫でながら呟き始める。

「確かにミソラにアイゼナツハ流魔双剣術の継承者であるレクティと同じ動きは求められないよな。でもレクティはミソラに前衛はできないとわかっているよな。」

「は、はいっ！」

独り言だと言っているのに思わず返事をしてしまうレクティにカズキは苦笑する。

「レクティの感じたことは殆ど答えみたいなものだけど、カナタが求めている答えじゃないんだ。それぞれが出来ること、出来ない事それを考えてみるといい。じゃあ俺はランニングの続きがあるから」

「あ、ありがとうございますっ！」

「昔な、カナタが俺に教えてくれたんだよ。想う力は糧となる、お前の力になるんだってな」

カズキはそう言い残して走り去っていった。

レクティはカズキの最後の言葉を疑問に持ちつつも、アルテミア寮

へと戻っていった。

## 仲間を想えば見えるもの

《ミストガン》 上空高度4000第三訓練空域。

あろうことが今日の訓練はリコとミソラが前衛という最悪の組み合わせだった。

『う、うそっ！あたしの攻撃が全然当たらない…』

『…少しは引き付けて狙え。だから君は自宅を砲撃するんだ』

『あとう、お2人とも！け、喧嘩はしないでくださいっ！』

『なによっ！あんただって慣れない前衛で戸惑ってるんでしょ！』

『既に5体撃墜したかなにか質問はあるか？』

『あ、あとうお2人とも聞いてますかっ!?喧嘩はよくないですっ！』

後衛から見る前衛2人の姿はあまりに心許ない。

経験豊富なレクテイの目にはなおさらそう映る。

前衛の役割は斬り込み隊長だ。

それなのにミソラとききたら手当り次第に砲撃するだけでダミーバードに命中していない。

リコは最小限の動きしかせず要所要所で攻撃している。

2人の動きを見てレクテイの眉が力のない、しょんぼり八の字になる。

「ん？レクテイどうかしたか？」

その様子をカナタは見逃さず声をかけた。

「そ、そのう…前衛っていうのは敵の数をがつつり削る斬り役なんです。でもお2人の動きはすこしちがくて…」

「ふーん、そう感じたのか」

「あとう、カナタさん」

「なんだよ？」

「後衛さんって…心細いんですね」

「まーな。後衛ってのは最後の砦みてーなポジションだから前衛と中衛が信用できねーと心細く感じちまうんだ」

レクテイはぞっとした。

リコさんはいつもこんなプレッシャーと闘っていたのかと。

「このままでいいのか？」

ハツとしたレクティがカナタへ申し訳なさそうに言う。

「き、休憩いれてくださいっ！」

休憩中訓練グラウンドの森の中。

「あ、あのっ！ミソラさんっ！」

「な、なにっ!？」

急に話しかけられたミソラが肩をビクリと動かして振り向く。

「ミソラさんって、凄いですよね。あんな激しい飛行を続けながら砲撃するなんてわたしにはできませんからっ！」

「そ、そうなのかな…?」

「はいっ！飛行技術は1級品ですし、魔力量も込みで尊敬してますっ！」

口下手なレクティがいうとかなりの威力がある言葉である。

レクティはその後ミソラへ前衛の動きをレクチャーし今度はリコのもとへと向かった。

「リ、リコさんっ！」

「どうしたんだレクティ？」

「後衛さんって、凄く難しいんですねっ！」

「ふっ、よくわかったな。さすがレクティだ。ミソラも気付けばいいが、アホだからな」

「次は大丈夫ですよっ！」

レクティはにばにばと嬉しそうにそう告げた。



それからの訓練は不思議とうまく事が運んだ。

3人の連携も取れておりダミーもしつかりと殲滅できている。

「へー、レクティもこの特訓の意味がわかった見てーだな」

「は、はいっ！」

「合格だ、カズキんとこ行ってこいよ。まだ教室にいるはずだぜ」

「あうう…いい、いってきますっ！」

模擬戦まであと2日、ミソラは果たして合格出来るのだろうか…

## ご褒美と事件の予兆

空が赤みを帯びて来る頃、カズキは教室で書類に目を通していた。「今度はAランクの生徒がやられたか…。最近物騒だよなーほんと」  
こここのところ続いている傷害事件。

近接系武器の所有者ばかりが狙われているためなにか引つかかることがある。

カズキが思い悩んでいると…

「カ、カズキさんっ!」

「ん、レクテイ?なんかあったか?」

「あ、あのう…」

「??」

「ご、ご褒美をもらいにきましたっ!」

「それってつまり合格したってことか」

「はいっ!カズキさんに仲間を想うことが大事って言われたので、ミソラさんとリコさんの事を考えたんです!そうしたらお2人がどんな動きをするのか見えてきて」

「因みにレクテイはこのポジションをやったんだ?」

「後衛さんですっ!」

「あー、俺もあの時は後衛だったな。カナタに怒られたけど」

「どうしてですか?」

「後衛の位置から魔双剣戦技撃ったら怒られた」

「…」

「ん?どうかしたか?」

レクテイはカズキが後衛から『魔双剣戦技』を使ったと聞いて愕然としている。

本来リーチの短い魔双剣では後衛は非常に難しいからである。

「な、なんでもないですっ!」

「そうか?それでご褒美は何が欲しいの?」

「えっと…」

レクテイはよく考えてみると何を貰えばいいのか分からなかった。

「なんでもいいぞ」

「じ、じゃあわたしの部屋にきてくださいっ！」

「ああ、いいよ」

カズキは傷害事件のこともある為、比較的安全である寮に行くのは賛成であった。

「じゃあついてきてくださいっ！」

「おう」

「へー、レクテイの部屋ってこんなに可愛いのか」

「その、恥ずかしいです…」

可愛らしく裝飾された部屋をみてカズキは感心の声を上げる。

「そっかやミソラは？」

「用事があるそうで夜まで居ないって言ってました」

「そっかそっか」

「あの…それで次は頭を撫でてください…／＼／＼」

「そんなことならお易い御用だ」

カズキはレクテイの前髪をくしゃくしゃと撫でてやる。

「あうあう…」

恥ずかしそうにしながらも安らいだ表情を浮かべるレクテイをみて、カズキも自然と笑顔になる。

それから暫く特務小隊での話や、魔双剣をいつから使っているのかなどたくさんの話をしていた。

外も暗くなってきたのでカズキが帰ろうとすると…

「ただいま〜」

「あ、ミソラさんっ！おかえりなさい！」

「おかえり」

「うん。…ってなんであんたがいるの!？」

「あ、それはですね…」

「レクテイ！わりーけど入れてくれ！」

ミソラがやってきた束の間、カナタの声がドアから聞こえる。

「は、はいっ！どうぞっ！」

「カナタそれって…」

「ああ…やられたよ」

入ってきたカナタの腕には傷だらけで意識を失ったユーリの姿があった。

## ガールズトーク

「…てなことがあったわけだ」

カナタはレクティとミソラにユーリの看病を頼んだ後、部屋の外へ出てカズキに起こったことを説明した。

「そんな熱烈な告白をしてくる変態もいるんだな…」

「カズキも狙われるかもしれないねーぞ？」

「男に好かれるようなこととした覚えはないけどな」

カナタとカズキが話していると

「ふむ、女神であるわたしを呼び出すとはいい身分だな

「お、リコ。来てくれたか」

やってきたリコにカナタが声をかける。

「ふん、カズキが緊急事態だと言ったのでな」

「ごめんごめん。でもどうしてもお前のチカラが必要でさ」

「そこまで言うなら仕方が無いな…／／／」

リコは率直に褒められたことでぷいと顔を背けてしまった。

「そろそろ大丈夫じゃねーか？」

「カナタ待ってっ！」

カナタはカズキの制止もきかずに部屋へ入ってしまった。

すると…

「な、なんでカナタ先輩がくるんですかーっ!!!」

部屋の中からユーリのものと思われる悲鳴が聞こえてくる。

「わ、わりー…見てねーから」

「つつつつ…!!」

ユーリは自分の姿を確認した後、カナタに裸を見られたことをショックに思い泣いてしまった。

カズキとリコは中の様子を察して部屋の外で待機している。

「あ、あのっ！ユーリさんこれをどうぞっ！」

見かねたレクティが着替えと暖かいミルクを差し出す。

ユーリは着替え、ミルクを飲み干した後魔剣を取り出してカナタへ襲いかかろうとした。

「カナタ先輩…覚悟してください」

「しかたねーだろ…変なやつに絡まれちまって冷や汗かいたと思つてよ」

ユーリは自分の身に起きたことを思い出す。

そしてまた気を失いそうになるのだが…

「これやるよ」

「なんですか…?」

カナタの声で意識を踏みとどめた。

「アイスの屋台のおまけのキーホルダーだ。諦めそうになった時とかはそれを見て俺が教えたことを思い出せよ」

「なんでこんなことするんですか…?」

「お前のこと心配だからにきまつてんじやん」

「っ…／＼／＼そういう事真顔で言うところ嫌いですッ!」

「とりあえず俺は帰るわ」

「わ、私も帰りますっ!」

「お前はもう少し話してから帰れよ、他にもお客さんは来てるしな」

「ふむ、邪魔するぞ」

「リコさん!」

「リコあんたこんな所でどうしたのよ?」

「カズキに模擬戦までここに泊まるよう言われてな」

「ふえっ!」

「なんで!」

「なんでも変態が現れたらしくわたし的美貌では狙われかねないらしい。それで3人で行動するようにとの事だ」

「なんとなくわかったわ」

「じゃあよろしくお願いしますねリコさんっ!ユーリさんも少しお話しませんか?」

「ええ、少しなら」

「じゃあ邪魔な男2人は帰るとするか」

「カナタ、俺の部屋いくか」

「お、いいな」

「模擬戦の戦術も教えてくれよな」

「ああ、いいぜ」

カナタとカズキは自室へ戻っていく。

残された女子4人はどんな会話をするのだろうか…

沈黙を破ったのはレクティだった。

「あ、あのっ！ユーリさんとカナタさんはお付き合いされてるんですかっ!？」

「ふむ、それはたしかに気になるな」

「えっ？あ、いやその…カナタ先輩とはそういう関係ではありません」

「しかしカナタは君には随分と優しいようだがな」

「うー…」

「ミソラさん？」

「な、なんでもないわよっ!」

「ほほう…」

「な、なによりコ？」

「君もあの男に御執心な訳か」

「そういうあんたはカズキ教官の前じゃデレデレのくせにつ!」

「き、貴様ツ何を言うか!」

女子が4人集まればやはり恋愛の話になるようだ。

しかしいつものようにミソラとリコの言い合いになっている。

「レクテイさんはどうなんですか？」

「わ、わたしですかっ!? そ、それはそのう…」

「やはりカズキ先輩ですか? 同じ魔双剣士ですし」

「は、はいっ! いくつか追いつきたいですっ!」

その後も彼女たちの話は続き夜も遅くなっていた。

「私はそろそろ部屋に戻りますね」

「はいっ! ありがとうございますましたっ!」

「お話聞かせて頂いてありがとうございます」

「ふむ、ためになったぞ」

すんなり打ち解けた彼女たちはいい表情をしている。

しかし

「でも模擬戦では負けませんよ」

ユーリの一言でミソラたちの表情が引き攣る。

「二わたしたちも負けません!」

「ふふっ、返事ですね。それではおやすみなさい」

ユーリはそういつて部屋を出ていく。

「ねえ、2人とも」

「なんだミソラ」

「な、なんでしようかっ?」

「今夜は作戦会議よ」

「とはいつてもミソラはまだ合格してないがな」

「うー! そんなのはいいのよ」

「ミソラさんにもヒントあげましょうか?」

「いいの? レクテイ」

「はいっ! 仲間を想うことが大切ですっ!」

「チームワークを得るには仲間を見ることだ」

「仲間を見る…! そういうことね。わかったわ! 今夜はあんたたちの

事、たくさん話してもらおうわよ?」

「なにか掴んだようだな」

「良かったです」

その後3人は夜中まで語り合い、お互いのことを知ることになっ



た。

## 蠢く闇

「レクテイ、敵を4体抜けさせてもいい？」

「はいっ！大丈夫ですっ！」

「へー、ミソラもわかったみてーだな」

3人を泊まらせた翌日、その日の訓練は流れるようにクリアされていく。

3人の間で何かあったのだろうか、カナタは微笑を浮かべつつミソラの元へ降りていく。

「合格だミソラ。そんで褒美は何が欲しい？」

「あ、あたしは…」

ミソラはカナタの間に一瞬考えた後に答えた。

「あたしは勝利が欲しい！3人で勝ってあんた達2人とも最後まで教官でいさせたいのよっ！」

へー、いつの間にか成長してたみたいだな。

カナタはミソラの成長を喜びながら、ミソラの頭に手を置いて撫で始め

「いい小隊長になったみてーだな。任せとけ、絶対に勝たせてやる」

カナタは自信たっぷり笑顔でミソラへ向けた。

訓練は終わり、小隊室へ戻ったミソラ達はカナタが手に入れた相手の映像を見ていた。

「凄い動き…」

「まあ、一人一人の力じゃお前らは勝てねーよ。でもな？お前ら3人なら話は別だ、お前らそれぞれのいいところを俺が引き出してやるからな」

カナタの笑みにつられミソラたちも笑顔になる。

「どんなにヘタクソな砲撃でも味方がフォローして撃ちやすい状況を作り出せば当たるもんだ。これまでの訓練でわかってるだろ？」

3人はカナタの言葉にコクリと頷く。

「とりあえず明日になんねーと勝負はわからねーからな。今日はゆっくり休んで明日に備えろよ」

カナタはそう言って小隊活動を終了させた。

ミソラたちは事件のこともありカナタに付き添われ寮まで帰っていった。

一方その頃…

「ぐあっ…」

『ねえ、そろそろあたしを受け入れたらどう？』

「なんでだよ…お前は誰だっ…！」

市街地で警備任務に就いていたカズキに異変が起こっていた。

『あたし？あたしはあんたの中に宿ってる力みたいなものよ。わかっ  
てんでしょ？体の中に魔力以外の力があるってことぐらい』

「それは…」

頭の中へ直接響いてくる声の言葉にカズキは何も言えなくなった。

『あたしを受け入れてくれればあんたはもっと強くなれるよ？』

「でもそれってつまりお前に体を渡すってことだろ？そしたら俺は俺  
じゃ無くなる…！」

『人間の癖によくわかってるじゃん。まあ少しくらいなら力をかしてあげてもいいわ。あんたのこと気に入ったし』

「そりゃどーも」

『あたしの力を使ったかったら魔力と合わせて練り上げなよ。体を魔力で満たす感じかな』

「そうかよ…」

『それじゃあたしは暫く眠るよ。あんたがピンチの時は出てきてあげる。でもその時はあんたを貰うから』

「上等だ…相手してやる」

そういつてカズキに語りかける声は消えた。

カズキに芽生えた新たな力…。

それは良いものなのか悪いものなのか、カズキは手探りで探すことになる。

カナタたちへ心配をかけないようにと心に誓うカズキであった。

## 模擬戦開始

大勢の人間が会場を埋め尽くす。

《ミストガン》最弱の小隊の試合でありながらこの熱狂ぶりなのはロイヤルガードのユーリ・フロストル率いるAランク小隊が裏切り者のカナタ・エイジ率いるFランク小隊を成敗するという内容であるからだ。

しかし大衆は気づいていない。

あの裏切り者は逆境でこそ輝きを増すことを。

かつて名を馳せた《黒の剣聖》が全てを覆せたのは、最後まで勝負を諦めなかったからであること。

ミソラ、レクテイ、リコの3人はソーサラーフィールドの中で相手の小隊が現れるのを待っている。

暫くして《ミストガン》のホープとも言われるA227小隊が姿を現した。

アクロバット飛行をしながら現れた彼女たちに会場はどつと湧き上がる。

会場全員が彼女たちの味方の様な雰囲気にもソラたちは寧ろ闘争心を燃やしている。

彼女たちの教官がそうであったように。

一方その教官たちはというと：

「赤っ恥を書く前に会場から姿を消した方がいいんじゃないですか？」

「へっ、ぬかせ。お前こそ、吠えづらかかせてやるよ」

通例であれば対戦する小隊の教官が隣あわせに座ることはないのだが2人は平然と腰を下ろした。

ちょうどその時、赤色の発煙弾が上空に高々と打ち上げられた。

ミソラはひたすら逃げ回る持ち味の飛行能力と魔力量でどんどん加速し距離を開けていく。

「逃げているだけでは勝てませんよっ！」

A227小隊の小隊長であるリリイはそう言いながら魔銃を構えミソラを追いかける。

ガキイイイン。ミスリル同士が激しくぶつかり合う音が鳴り響く。

レクテイは魔剣使いのサーシャへ流麗な動きで魔双剣の連撃を繰り出す。

『サーシャさん援護するよー！』

魔弓使いのグレッグがレクテイへ矢を放つが、

『ふっ、わたしの仲間へは手出しはさせん』

リコが狙撃でその矢を撃ち落とす。

一進一退の攻防を繰り返す中、逃げ回っていたミソラが反撃に転じた。

逃げながら収束させていた魔力をリリイへと放つ、しかし移動しながらの砲撃などミソラに出来るはずもなく外れる。

リリイが体をそらして飛行速度が下がった一瞬の隙にミソラは体を反転させペンダントを奪いに襲いかかった。

だが…

「きゃっ!？」

「ふふん、あなた達がペンダントを狙ってくるのは読んでますよっ!」  
リリイは左手に魔剣を展開し斬り上げてきた。

ミソラは魔力障壁を展開し辛うじて防ぎきった。

「期待はずれですね」

「ん?なにがだよ」

「どんな戦い方をしてくるのかと思えば単純なペンダント狙い。もう勝負はつきましたね」

「まあ、あながち間違いでもねーな。でも誰がペンダント狙いなんて言っただけ?」

煽るユーリにカナタは不敵な笑みを浮かべながらそう言った。

決着、そして…

「ユーリなら常に手堅い手を打ってくる。例えば相手がペンダント狙いだとわかれば自分の小隊をV陣系にシフトさせるとかな」

カナタがそう言った直後の空中では、サーシャとグレッグのツートップになり、リリイを守りやすい形を作っていた。

まさにカナタの言う通りである。

「た、たった1度予想しただけでは…」

「そしたらミソラたちはI陣系にシフトする。前衛をレクテイ、中衛をリコ、後衛がミソラだ。一直線になるからリリイの位置からじゃミソラの動きは見えずらくなるだろうよ」

リリイたちの動きに応じるかの如く、間髪開けずにミソラたちがシフトした。

「そんでリリイからの注意が薄くなったミソラが逆転の切り札を作り出す」

カナタはその後も淡々と予測だけを語り続ける。

そしてミソラたちに油断する素振りには微塵もない。

「そ、そんなことが…。ま、まさか…あれはっ!？」

ユーリは見逃さなかったミソラが握る魔砲剣のシリンダー型縮退炉がガシャンと一回転するのを。

「ん、言わなかったか?この模擬戦、ここまで全部俺の読み通りだった」

「ぜ、全部ですかっ!？」

「次はリリイが1人で突撃するぜ。あいつは自分のことを優秀な狩人だと思ってる、それにミソラのことを簡単に仕留められる獲物だな」

「まさか…そんなことはありませんっ!」

「いや、わざわざ仲間の手を煩わせることも無いって自分で行くさ。自分が獲物になってるって気付かねーままな」

案の定リリイは単独でミソラを仕留めようと突出した。「ダメですリリイ!そっちへ行っては!!」



「確かに勝負はついたぜ。さあ、ここが正念場だ！ミソラ、やってやれ！」

高ぶる感情を抑えられずカナタはフィールドへ向けてそう叫んだ。

肉薄するリリイの姿にミソラは再度反転、遁走する。

観客席からはブーイングが沸き起こるが、そんなものを気にする余裕は無い。

『ほらほら、どうしたんですかっ！逃げてばかりじゃ勝てませんよっ！』

『……そんなのわかってるわよ』

ミソラは視界の中で仲間たちの動きを確認した後全速力でライン際へと逃げていく。

魔力の収束までの時間を稼いでくれている仲間たちの為にもミソラは速度を全く落とさない。

ここぞと言うタイミングでヴァーチカルブーストした。

『ふんっ！ライン際に追い詰められて今度は上ですかっ！苦し紛れにも程がありますねっ！』

逃げると言うことは収束が不完全なことの裏返し。

そう判断したりリイは同じ軌道でミソラを追いかける。『これで終わりですっ！』

必中を確信して引き金を絞ろうとするリリイ。

しかし獲物を仕留めることに夢中だった彼女は見逃していた。

どんな強者であっても垂直上昇時には飛行速度が減速するという  
ことを。

制限高度まで上り詰めたミソラが反転、武器の砲口を突進してくる

リリイへと向ける。

収束などとつくに完了していた。

ミソラが待ち望んでいたのは絶対に外れないタイミング。

『し、しまった!?!』

空中戦に於いて、上をとることのメリットは、位置エネルギーが大きいことにある。

下から上昇するよりも、上から降下してくる物の方が必然的に速い。

つまり、逃れることは出来ない。

この世の物理的法則がミソラへ味方する。

リリイは急旋回しようとして一瞬躊躇ってしまった。

何故なら相手が逃げ足の速い奴だからだ。

その迷いがすべての選択肢を奪ってしまう。

ミソラは即座に引き金を絞った。

「もらったっ!!」

〈魔砲剣戦技―ストライクブラスター〉

轟音。肩の関節が外れ両腕がもぎ取られるかのような反動。

天を焦がすような白銀色の光の本流がリリイを襲う。

薄れゆく意識の中リリイは思った。

な、なんでこんなに強い子たちが落ちこぼれ小隊なんて蔑称で呼ばれてるんですかっ!?

そのFランク小隊に彼女は敗北を喫した。

しんと静まり返る会場。

生徒たちがまさかの一番狂わせに嘩然とする中。  
ビーツ！ビーツ！

魔甲蟲の襲来を告げる警報が鳴り響いた。

次の瞬間、会場の放送席が爆発。

観戦していた生徒たちは逃げ惑い、会場から避難していく。

残ったのはカナタ、ユーリ、そしてミソラたちだけ。

そして、そこに不気味な笑い声を上げながら男が舞い降りる。

「ふふっ、負けて絶望した貌も素敵だねユーリ」

「だ、誰ですかっ！あなたは…っ!？」

「いやだなー、僕だよ。覚えていないのかいユーリ？」

そんな言葉を口にして見せたのは、炯炯と輝きを発する目をした、ラインの細さが目立つ青年ーリアルだ。

「ああ、愛してるよユーリ。今すぐ僕の愛を受け入れてくれっ!」

そういうや否や、魔剣を取り出しユーリへ襲いかかる。

しかし…

ガキイイーン!

激しい金属音と共にレアルの一撃は弾かれる。

「また邪魔をするのかいつ！カナタ・エイジイイツ!」

「わりーな、俺の大切な教え子たちをやらせる理由にはいかねーんだ」  
逆手にダガーを構えたカナタがその凶刃を防いだのだ。

「いいじゃないか、相手してあげるよ」

そう言ってレアルが指をパチンと鳴らすと、ソーサラーフィールドを発生させるモニュメントが砕け散った。

「ユーリは下がってろ」

「カナタ先輩の後ろで隠れるなんてできませんっ!」

「たまには先輩の言うことを素直に聞けよ」

「まずいな。カナタはそうはつきりと感じた。」

ユーリの悪いくせであるカナタへの対抗意識が正常な判断を邪魔している。

どうしたものかと頭を掻きながら、カナタは次の作戦を練り始めた。

歪んだチカラ

「ふふっ、ユーリ。かわいい、かわいいよユーリ」

レアルはユーリへの想いの丈を不気味な笑みを浮かべながら紡いでいく。

「かは……っ！」

声にならない擦れた悲鳴。

レアルはまるで瞬間移動したかのようにユーリの背後に周り首を締め付ける。

ユーリも必死に痛みを堪えながら、気丈にも、キツと睨みつける。

そんなユーリの行動にレアルの欲望はますます満ちていく。

絶対に逃げられないのにもかかわらず、まだ抵抗しようというその姿勢。

その光景は、決して出ることの出来ない籠の中で必至に足掻く小鳥そのものを思わせる。

「ああ、僕は今ユーリと愛し合っている」

ペろり。

嫌がるユーリの首筋から左耳にかけてレアルは思わず舌を這わせた。

湿り気のある不快な感触に、ユーリは思わず頬を強ばらせる。

「……てめえっ！」

「おおっと、動くなよ。カナタ・エイジ」

レアルは右手に持つ魔剣を、ユーリの喉元へ突きつけた。

「もし一歩でも動いたら、ユーリがどうなっても知らないよ？あは、あははははっ！」

不気味な笑い声を漏らすレアルに、躊躇したカナタは固唾を飲む。

仮にここで崩力を解放したところで、レアルの警戒心を増すだけだ。

そうなればユーリを救うことは出来ない。

そんな時突如として白銀色の砲撃がレアルを襲った。

そのタイミングを逃さずカナタは殺気を伴って接近。

状況把握に戸惑ったレアルはユーリを離して後方へ跳躍した。

「誰だい、僕とユーリの仲を引き裂いたのはっ!？」

「あ、当たっちゃった…」

そこには威嚇射撃のつもりだったのだろうが当たってしまったことに戸惑うミソラの姿があった。

「お前ら、なんで逃げてねーんだよ…」

カナタは再び頭を抱えた。

カナタはミソラたちになぜ残っているのか問い詰める。

「馬鹿なミソラが教官を助けに行くと聞かなくてな」

「それであのう…ミソラさんを一人で行かせるくらいならって…」

「あー、わかりい。ミソラが馬鹿なことを忘れてた」

「誰が馬鹿よっ!」

「二「お前だよっ!」二」

「で、でも。あんた一人じゃあんなのに勝てないじゃない」

「まあ、助かったよありがとな。でも仲間ならいるじゃんか」

カナタがそういつた時何の前触れもなく天から、赤い光条が降り注ぎレアルがいた場所を串刺しにする。

そこにいたのはクロエ・セヴィニー。

《ミストガン》最強の攻撃力を誇る魔杖使いである。

躲しきれなかったレアルは右腕を亡くしていたが、右肩の付け根にある巨大化したガン細胞のようなものから腕が再生される。

「《寂滅姫》の砲撃は厄介だからね、ご遠慮願うよ」

突如としてレアルが指揮者のように手を振り回すと、カマイタチが沸き起こり閉鎖空間を作り出した。

クロエがどんな砲撃を繰り出すもその空間を突き破ることは出来ない。

「クロエが無力化された、か」

それと同時にカナタは決心していた。

この状況を打開するには崩力を使うしかない。

ミソラやカズキたちは薄々感づいてはいるが、ユーリにもカナタが病氣療養となっている理由がバレるだろう。

しかし迷っている暇などない。

カナタは目を閉じて意識を集中させた。

カナタは呼吸を整えて全てを空にする。

万物の流れを無意識に感じ、潜在的な意識の中でふたつのチカラを意識する。

ひとつは魔力。もうひとつは呪力。

人間のチカラ。人外のチカラ。

纏め、練り上げ、捏ね練り回し、収斂させる。

カナタの体内の奥底で、黒いうねりの様なものが生じる。

そしてそれらすべてが混ざり合い次第に一体化したチカラが生じる。

生み出されたのは《崩力》

本来合わさることない相反するチカラの合成物であり、未だその存在が証明されていない世界の理を破壊する叛逆のチカラ。

放たれる禍々しい気配。

それを出すカナタにユーリは己の目を疑った。

「な、何なんですかそのチカラはっ!？」

「話は後だ、今はあいつを片付ける」

そんな言葉を言いながらカナタはリアルへ向かって悠々と歩き出

した。

まるで自分の勝利をかくしんしているかのように。

次の瞬間カナタの左上腕部より先が残像の速度で動く、握られたグラディウスはレアルの皮膚を斬り裂き血を吹き出させる。

制限戦技―閃光剣を放ったのだ。

「ふーん、人間にしては君もやるね。その感じ高々人間が魔甲蟲に選ばれたって訳だね？」

「魔甲蟲に選ばれた、ね。俺は生憎お前ほど楽天家じゃねーから、自分のことを特別視はしてねーよ」

「君が裏切り者になったのはそのチカラのせいかい？ 人類の敵のチカラを宿した人間がいるなんて知られたら不味いもんね」

「……黙れよ」

カナタは閃光剣を連発。

腕の筋繊維がちぎれるのを厭わずに幾度も繰り返し放ち続ける。

「そんなの効かないよ？」

そう言つてレアルはカマイタチを放ち相殺しようとする。

しかし、カナタの一撃が右肩へ当たりそうになると体を捻って間合いを取った。

次の瞬間

「サポートします！カナタ先輩っ！」

「待てユーリっ！」

カナタの静止も虚しくユーリは構えた魔剣でレアルに切りかかる。

しかし…

「えっ！」

気づいた時にはもう遅い。

人外のチカラを宿したレアルの瞬発力を持ってすれば反撃など容易いのだ。

しかし次の瞬間ユーリが軽く突き飛ばされると同時に左脇腹を貫かれ、負傷したカナタの姿があった。

「ど、どうして…っ!？」

「さーな。体が勝手に動いちゃったんだよ…」

チカラなくカナタが崩れ落ちる。

思わぬ儲けにレアルはゲラゲラと笑った。

「あははは、危ないところだったよ。…ねえユーリ、裏切り者が君を庇ったおかげで僕は君を愛することができる」

ユーリは絶望した表情。

その様子を見てレアルは嬉々として続ける。

「ここで君が僕の愛を受け入れてくれないとこの男が犠牲になるよ？  
ほら僕の腕に飛び込んでおいで」

「カナタ先輩…ごめんなさい…」

ユーリは涙を流しながら武装を解除する。

自分が犠牲になればいいとユーリが足を進めた次の瞬間。

「おい、俺のかわいい教え子たちの晴れ舞台を台無しにした挙げ句。  
俺の仲間はまだ手を出すとはいいい度胸してるじゃねーか」

「なんだって？」

レアルが声のする方へ振り返るとそこには…

「覚悟しろよ？」

レアルを冷たい瞳で見下すカズキ・アルカラスの姿があった。



## もう一つのジョーカー

「おかしいね。どうやって入ってきたんだい？」

「体は強くなっても頭は弱いままみてーだな。最初からいたんだけどな、気づかなかったか？」

「言ってくれるじゃないか…!!」

レアルが怒りを顔にすると彼の姿が異形に変わっていく。

「ユーリ、今の内にカナタと共に後退」

「了解です…」

「好きなんだろう、カナタのこと。だったら絶対に傷つけさせんなよ」

「…はい！」

カズキの言葉にユーリはしっかりと返事をして後退していく。

ミソラたちと合流したユーリはカナタと何か話しているようだ。

「ユーリを愛してあげるの君を潰してからだね」

「残念だけどそれは叶わねーな。お前は俺がここでバラバラに斬り刻んでやる…」

酷く冷たい声でそう言ったカズキは魔双剣を召喚し目を閉じた。

カズキは息をゆっくりと吐き、体にチカラを満たしていく。

万物の流れを意識し、潜在的な意識の中でふたつのチカラを意識する。

ひとつは魔力。もうひとつは闇力。

人間のチカラ。人間に在らざるチカラ。

纏め、練り上げ、体の隅々まで行き渡らせる。

カズキの体内に禍々しい渦が生じ、それら全てが混ざり合い次第に一体化したチカラが生まれカズキの体を満たしていく。

生み出されたのは《穿力》

本来合わさることの無いチカラの合成物であり、存在すらも知られていない世界の理をもろともせず突き進む叛逆のチカラ。

カズキの脳内に語りかけてきた存在が言った、カズキの中に生まれ  
たジョーカー。

「覚悟しろよ、蟲虻」

カズキはゆったりと歩きながらレアルへ近づいていく。

「面白いヨォ！君も選ばれたんだねエ!!」

異形と化したレアルは腕を無差別に振るい、カマイタチを放つ。

「闘い方がなあってねーな。そういうのはこうやって放つんだよー」

《魔双剣戦技―千年氷牢（エンドレスフリーズ）》

カズキの魔双剣のルーン文字が輝きカズキの周囲に数1000本の  
氷柱が召喚される。

氷柱はカズキが魔双剣を振るう度にレアルへと発射されカマイタ  
チを相殺していく。

「くそっ！なんでだ!?僕は誰よりも強くなったはずなのに！」

レアルが放つカマイタチがカズキの放つ氷柱を相殺しきれなくな  
り異形と化したレアルの体へと突き刺さる。

レアルは必至に右肩を庇いながらカマイタチを出し続ける。

「次で仕留めてやる。この技を使うのは久しぶりだから加減が出来な  
かったらごめんな？」

カズキはそういつて氷柱を受け続けるレアルへ笑いかける。

しかしその笑みはとても冷たく、レアルの心を突刺すようである。

「カズキさん…」

「レクテイ、どうしたの？」

「カズキさん、凄く強くてカッコイイんですけど…ちよっぴり怖いです…」

レクテイは心配そうな顔でカズキを見つめている。

「…レクテイの言う通りだ」

「あ、あんた大丈夫なの!？」

「カ、カナタ先輩…っ!」

「あいつの顔色見てみろよ、真っ青だぜ。まるで氷みてーだ」

カナタの指摘の通りカズキの体は限界に近い。

闇力という人間に在らざるチカラを使っている以上、体への負担は尋常では無い。

それは同じ人外のチカラを扱うカナタにとってはよくわかることであつた。

「彼を…カズキを助けることは出来ないのだろうか？」

「リコさん…。わ、わたしも助けたいですっ!」

「そうよ!何のために残つたつて言うのよっ!」

「わたしも…先輩2人に助けられた分をお返ししたいです」

「わかつた、じゃあ俺がお前らに必勝の作戦をやるよ」

カナタはカズキの心配をしつつ、大切な教え子たちに新たな作戦をさすけ始めた。



先程までリアルと対峙していたカズキがレクテイの目の前で吐血していた。

「カズキ…さん…?」

「あはははははっ! やっぱりだね! 可愛い教え子ちゃんを狙えばやられるてくれるとオモツタンダヨオ! カナタ・エイジと同じヨウニネエ!!」

「わりい…カナタ…」

カズキは顔面蒼白で血を吐きながら墜落していく。

「カズキ!」

リコはカズキを墜落するカズキをどうにか受け止め、ゆっくりと地面に下ろした。

「…てめえ!」

カナタは怒りの表情を顔にし、傷を無視してリアルを叩きのめそうと再度グラディウスを召喚するが。

「待ってください、カナタさんっ!」

「レクテイ…?」

そこには普段はおどおどとして大人しい少女が怒りの表情をして立っていた。

「さつきカナタさんが下さった作戦をここでやりたいです。いいですか? ミソラさんっ」

「ええ、あたしもやられっぱなしじゃ気が済まないわ」

「わたしもあの卑しき下臈に解らせてやらねばならんな」

レクテイたちは自分たちの教官を姑息な手で倒したリアルへと向き直す。

「カナタ先輩、任せてください。今は…今だけはあなたを信じます。だからカナタ先輩もわたしを信じてください。先輩たちの生徒さんはわたしが責任をもって守ります」

「ああ、いいぜ。征ってこいよお前ら」

カナタは教え子たちを送り出し、倒れた相棒の元へと降りていく。

「お前も無茶するぜ」

「カツコつけたわりにやられちゃったけどな」

「そんなことねーよ。《ミストガン》最強の魔双剣士の闘いは、ちゃんと生徒たちの心に響いたみたいだぜ」

「なら…いいか…」

カナタとカズキはこれから起こるであろう展開に笑をこぼしながら、自分たちの大切な生徒たちを見守ることにした。

## 全てを貫くもの

会場内を滑るように駆け巡り、ユーリを加えたミソラたち4人がレアルの周りを円を描くように激しく飛び交う。

「地上じゃ勝てないと思って空に逃げたのか。あの裏切りものとエースくん無しで勝てるでも思ってるのかい？」

負傷したカナタとカズキを手玉にとるのは容易い。

だがそれでは面白みがないとレアルは空中への誘いへ乗った。

レアルは飛び上がると、先ほどと同じようにレクテイへとカマイタチを放つ。

『レクテイ狙われてるわよっ！』

ミソラが砲撃でカマイタチを相殺する。

その結果今度はミソラへとカマイタチが放たれる。

『ミソラ、そのままそいつの注意を引いておけ。少なくともあと4発分はな』

リコからの鋭い指示にミソラは速度を上げ躲し続けるが、模擬戦の疲れからか速度がいまいち上がらない。

『リコ、アシスト頼めるっ!？』

『ふっ、仕方ないな。そのまま飛び続けることだ』

何処からともなく魔力射撃。

ミソラへと迫っていたカマイタチは相殺される。

ユーリは思う、何故ここまでやれるチカラがあつてFランク小隊と蔑まれているのかと。

そこにカナタとカズキという教官の功績があることをユーリはまだ知らない。

目敏いリコは隙を突いてレアルにも狙撃をしていた。

『ふむ、硬いな』

リコの射撃をもらともしない甲皮はダイヤモンドかと思わせる程の強度を誇っていた。

『リコさんっ！今度は私が仕掛けますっ！』

レアルの六時の方向から忍び寄っていたレクテイが容赦なく袈裟

斬り。

だが、ぱりんっ、という音と共に彼女の愛剣であるアマノハバキリの1本が根元から折れてしまった。

『くっ……！』

レクティはすかさず後退、ミソラたちと合流し更に高度を上げていく。

「ふふっ、ユーリ。早く君と一緒にになりたいよオ」

欲望に塗れたリアルはミソラ立ちを追いかけていく。

その姿を確認したミソラたちは

『あいつが付いてきたわね……』

『ああ、フェーズ2へ移行だ』

『了解ですっ！』

ミソラたちは作戦通りに身を寄せ合う。

最後の攻撃を仕掛けるとでもいうのだろうか。

「あれ？ユーリはどこだい？教えてくれないと殺しちゃうよ？」

リアルはユーリを失ったらしく、ミソラたちへと問いかけてくる。

じわりじわりと接近してきたリアルが魔剣を前に突き出した次の

瞬間。

『……いまですっ!!!』

ミソラたちは散開、その背後から人影―ユーリの姿が露わになる。

「……やっぱり槍の方がしっくりきますね」

トライデントに酷似した形状の槍、へ全てを貫くもの（トリシユ―

ラ）を携え突撃体制をとる。

「覚悟してくださいっ！」

そして、砲弾の如く弾け飛び、襲い掛かった。



「ああ、ユーリ。やっと僕の愛を受け入れてくれるんだね！」  
レアルは突撃してくるユーリを興奮しながら魔剣で迎撃しようとする。

そこへ向かって1発の砲弾の如く加速するユーリ。  
重力加速度と位置エネルギーを味方につけている。

魔双剣を叩き折る程の強度を持つ胸部の甲皮をへトリシューラが正確に突刺す。

勢いに負けて地上へと押し戻されるレアルだが、勝利を確信していた。

なにせこの体を貫き通せるものなど存在しない、仮に叩きつけられなくてもその後ユーリは自分の腕の中。

そう思った時だった。

「ば、馬鹿なッ！なぜ僕の甲皮がたかが槍なんかにはっつ！」

レアルの甲皮が削られ始めた。

右肩に突き刺さった魔槍がギィィィィンという音を立て振動していた。

それも超高速で。

「たかが槍……？存知ないなら教えて差し上げます。この魔槍の名は〈全てを貫くもの〉。魔力振動機構を搭載した、アンチカメラの特装魔槍です。貫けないものはありませんっ！」

物体を切断するのではなく、分子レベルで切削する魔槍。

レアルの右肩を貫いたユーリはそこから急制動。  
くるくると円を描くように回転しながら、地面に着地した。

レアルは右肩に風穴をあけられつつも、2本足でたっている。  
致命傷には至らなかつたようだが、止めどなく溢れる緑色の液体を見るにかなり効いているようだ。

「だけど、また再生すれば……」

「いいえ、あなたの負けですよ」

そう吐き捨てたユーリは縦横無尽に駆け回りレアルを斬り砕く。

カナタに魔槍士としての才能を見出され、ひたすら磨き続けたその技術は電光石火の如く振舞われる戦技である。

だから我々は彼女のことをこう呼んだ。

〈空穿の閃跡（ブリューナク）〉と

「これで終わりです」

剥き出しとなった黒い細胞の塊に、ユーリは正確に槍撃を浴びせる。

「う、うそだっ……、こんなことあるわけないっ！」

——本能的恐怖。

どうにか起き上がったレアルはあたりを見渡す。

「あなたの考えは読めています。だからこそ、止めておいた方がいい。それをやったら、わたしはほんとうにあなたを赦せなくなる」

その言葉は届かなかつたのだろう。

レアルは外壁に背中を預けているカナタとカズキを見つけると、脚の靱帯を強化して跳躍。

無防備な2人に攻撃をしようとした時。

「…矮小な存在の考えることはほんとうに下衆ですね」

真後ろから侮蔑の声。

「警告した筈です。あなたの考えは読めています。だからこそ、止めておいた方がいい、と。…跪きなさいっ！」

いつの間にか背後に移動していたユーリがリアルに足払いをかけ、喉元へ「ヘトリシューラ」を突きつける。

「馬鹿なッ。こいつらを仕留めれば僕が負けることなんて…」

「へっ、わりーな。お前はとつくに俺の術中に嵌ってたんだよ」

「それってつまりは最初からお前の負けってことだな」

カナタとカズキは不敵に笑う。

そんな姿を見たユーリは

「お2人の優れたところは、鍛え抜かれた身体技能だけではありません。この人たちは最後まで足掻き続けることを怠らない、どんな状況でも仲間を見捨てない。絶対に屈服したりはしないからこそ強いんです！」

今度こそリアルは本当に項垂れた。

## 敗軍の将？

ミソラたちに周囲を固めさせる中、ユーリは鋼糸入りの拘束テープでリアルを素早く縛り上げる。

そんな様子を見てカナタは言った。

「こいつは俺の大事な教え子だから、お前の好きにさせるわけにはいかねーんだよ」

拘束を終えたユーリがカナタへと問いかける。

その表情は不安に包まれている。

「カナタ先輩、あのチカラは…？」

だがカナタは飄々として、他人事のように答えた。

「さーな。朝起きたら身についてたんだろきつと」

カナタの傷は既に塞がっていた。

陣地の及ばぬチカラが影響しているのは言うまでもない。

「カナタが病気療養中になってるのはあれのせいだよね」

そこにカズキも合流してきた。

「カズキ先輩ですよ！なんなんですかあれは！」

「あれ？なんか最近もう1人の自分みたいなのがいるんだよなー」

「お2人とも…ふざけているんですか？」

「そんなとねーよ」

そんな話をしていると

「何が起こったの！説明してちょうだい！」

レイブンネストを率いてガーディアンリーダーであるフロンが現れた。

「二げっ」

カナタとカズキは顔を見合わせたあと

「あー、ぎっくり腰見てーだ。これは今すぐ休まねーと慢性化しちまうわ。てなわけで俺は帰るわ」

「ガーディアンリーダーに問い詰められるとメンドクサイから俺も逃げるわ。じゃあな」

カナタとカズキはそう言って会場をあとにしていく。

ミソラたちもそれに続いて出ていった。

「ふふっ、やっぱり2人も変わってないね」

「えっ?クロエ先輩!」

ユーリの近くには、いつの間にかクロエがいた。

ニコニコと天使のような笑みを浮かべながら話し続ける。

「カナタが裏切った理由をわたしも良くはしらないの。でもいつもあやってひとりで頑張つて、それで勝ち誇ることなく帰っていくんだ。カズキもカナタがいなくなった後に自分を責めてばっかでさ?それを糧にどんどん強くなってくのになんてそれでも自分のことを評価してもらったりはしないの。ほんとに考えてるのかわかんないよね」

確かにその通りだとユーリはおもう。

「カナタ先輩!カズキ先輩!」

ユーリが何かを告げようと大きな声を出す。

「今は無理でもいつか……いつかお2人のチカラになってみせますっ!お2人に宿った異質なチカラもなんとかしますからっ!」

2人は後ろには振り向かない。

成長した教え子の姿に笑顔を零してしまいそうだからだ。

2人はこの言葉に答えるように後ろ手を上げて見せた。

謎の連続襲撃事件はユーリの手によって解決したと公表された。カナタとカズキが闘ったとも噂されたが、2人は公表を望まなかった。

それぞれが宿した異質なチカラを隠すためだ。

ユーリという英雄が《ミストガン》に生まれたのと同じ頃…

「今日はお前たちに新入隊員を紹介するぜ。敗軍の将であるユーリ・フロストル新入隊員です」

「誰が敗軍の将ですかっ!」

バタンと大きな音をたててカナタに喰ってかかるユーリ。

「でも負けたじゃんか。間違っではないだろ?」

「……………」

ユーリは無言で怒りを顔にしている。

そんなふたりの様子を小隊室の後方で見ていたカズキは笑いをこらえるのに必死だ。

「それじゃあ敗軍の将さん。自己紹介たのむわ」

「……………新入隊員のユーリ・フロストルです。特務との掛け持ちになりますが、先輩方のご指導を受けることになりました。これでいいですかっ? (ピキッ)」

「(「うわーユーリさんホントに怒ってる) よ、よろしくお願いしますっ!」」

「んじや今日はカズキからもあるみたいだぜ?」

「俺からはこれだ」

そう言っつてカズキはケーキの箱を取り出した。

「ミソラから選んでいいよ。お前にはご褒美やれてなかったしな」

「えっ、いいの!?!」

その後でリコとレクティも選びたいときった表情で見ている。

それを見たカズキは

「余り物には福があるかもしれないぜ?」

それだけ口にした。

入っているケーキは6つ。

色鮮やかなフルーツケーキと、素材の風味溢れるマロンケーキ。

大人の味のビターチョコレートケーキに同じく大人の味であるガトーショコラ。

そして瑞々しいメロンケーキと地味なシュークリーム。

「うーん、どれにしようかな…?」

どれがいいかと悩んだミソラはフルーツケーキに決めて手を伸ば

したのだが、横からすらつとした美しい色白の腕が伸びてきて獲物を奪われた。

「ちよ、ちよつとリコっ！それはあたしのよ！」

「わたしはラズベリーが好みなんだ。君はシュークリームを食べるといい」

「あ、ちよ、ちよつと！」

「ふっ、まずまずの出来だな」

そんな淡白な感想とは裏腹に、リコは至福の表情で食べる。

「あのう…ミ、ミソラさん。わ、わたし…マロンが大好きなんです。い、いいですかっ？」

チワワのように瞳をうるませてレクティが見つめてくる。

順数無垢な少女を傷つけるようなことをミソラができるはずもない。

「い、いいわよっ？」

「あ、ありがとうございますっ！」

にはにぱと笑顔を零しながらレクティはマロンケーキを口にする。

「あま〜いですっ！カズキさんっ！ありがとうございますっ！」

「ミソラ…成長したんだな」

カズキはケーキを譲ったミソラの姿を見て教え子の成長を喜ぶ。

「じゃあ次は俺の番か」

カナタはチョコレートケーキに手を伸ばし、口へ運んだ。

「カズキのセンスもなかなかいいじゃねーか」

「さんきゅーな。んじやミソラはどれがいいんだ？」

「ここでミソラは考えた。」

ケーキを買ってきてくれたカズキと、今や《ミストガン》の英雄とまで呼ばれるユーリのどちらかにシュークリームを食べさせて良いのかと。

「じゃあ…わたしはシュークリームにする」

ミソラは一言つぶやいてシュークリームに手を伸ばす。

「ユーリはっ！」

「わたしはメロンケーキを」

ユーリはメロンケーキを口にして笑顔を見せる。

「じゃあ俺はガトーショコラだな。やっぱりあの店のはうまいな。ミソラはどうだ？」

「っ!?なにこれ!ただのシュークリームなのに凄く美味しいっ!」

「それはレクテイたちといった屋台のやつなんだけどな?数量限定の絶品なんだよ。特別に貰ったやつだ。俺も昔カナタにご褒美でもらってたな」

「そんなこともあったな」

カズキもカナタは懐かしそうな表情を見せる。

「それじゃあ俺らから最後に一言」

カナタとカズキは本当に嬉しそうに、そして自信たっぷりとミソラたちに告げる。

「お前ら本当によく頑張ったじゃんか。初勝利、よくやったな!」



## カズキの企み

カズキはミソラ、レクティ、リコを小隊室に集合させて話し始めた。  
「なによりいきなり呼び出して」

「あのう…カズキさんっ…?」

「ふむ、女神なわたしを呼び出したんだふざけた内容だったら許さんぞ?」

ミソラは訓練を中断させられたことに若干イライラし、レクティはこれから何が起こるのかわからずおどおど、リコにいたっては訓練はしたくないという感情が滲み出ている。

「まあ、まずは話を聞けって」

「そういえばあいつとユーリさんは?」

ミソラはカナタがいらないことに疑問を感じカズキに問いかけた。

「カナタには時間稼ぎをしてもらってるよ。んで本題なんだけどユーリが入って少ししたけどちゃんと歓迎会して無かっただろ?」

「そういえばそうですねっ…。わ、わたしユーリさんをちゃんと歓迎したいですっ!」

「ああ、そうだな。えらいぞレクティ」

「あうあう…」

カズキはレクティの前髪をくしゃくしゃに撫でてやる。

レクティも恥ずかしそうにしながらもなすがままだ。

「ふむ、ユーリもこの小隊の一員だ。歓迎してやらん理由は無いな。それでその歓迎会とやらはいつやるんだ?」

「ん? 今日だけど?」

「きよ、今日!?!」

「なんだミソラ、都合悪いか?」

「そんなことないけど…準備はどうするのよ?」

「それはちゃんと考えてあるさ。先ずリコには悪いけど倉庫から荷物をレクティの部屋までとってきて欲しい。ちよつと重いかもしれないけど頼めるか?」

「ふむ…疲れるのは嫌なのだが」

「後でマッサージしてやるからさ」

「そ、そうか？ならやってもいいぞ」

「よろしく頼むよ」

リコはマッサージという言葉を聞いて直ぐに肯定の返事をした。

カズキはこの前のマッサージがそんなに良かったのか？と思いつつもリコが了承してくれたことに安堵した。

「ミソラは料理の食材調達だ。目利きは得意だろ？」

「ま、まあそうだけど。ユーリさんの為だしやるわよ」

「ありがとな。レクティは俺と歓迎会の料理を作るぞ」

「わ、わかりましたっ！でもカズキさんって料理できるんですかっ？」

「こう見えて得意だぞ？カナタがたまに食いに来るしな」

「そうなんですかっ！こ、こんど教えてくださいっ！」

「ああ、いいぜ。その時は試食に皆を招待しないとな」

「ねえ、あいつはなにやるのよ？」

「ん、カナタか？あいつはユーリの足止めを今やってるけどそろそろ一旦終わるだろうからしばらくは別の準備だな。んじゃそろそろ始めるか？会場はレクティの部屋な」

「わかったわ」

「わかりましたっ！」

「ふむ、わかったぞ」

4人は各々の仕事をこなすべく、小隊室から出ていった。

ユーリ菌？

「もーなんなのよ。もう少し早く言ってくれば良かったのに！」

ミソラはカズキが歓迎会をやることには賛成だが、準備の時間の無さに不満があるようだ。

「ミソラさん、どうかなさったんですか？」

「ええっ!？」

「そ、そこまで驚かなくても…」

「ご、ごめんなさいっ！」

驚くミソラの視線の先には歓迎会の主役であるユーリ・フロストルの姿があった。

「今からお買い物ですか？」

「カ、カズキ教官に頼まれたんですよっ！」

「そうなんですか。よろしかったらお手伝いしますよ？」

「えっ、あ、いや大丈夫です！ホントに大丈夫ですから！じゃああたしは行きますね！」

「え、ええ。わかりました」

あからさまに自分を避けるようなミソラの態度にユーリはどうしたのだろうか。怪訝そうな表情を浮かべた。

「ふ、ふむ……。彼の言っていたとおりなかなかの重さではないか」

リコはカズキに頼まれた荷物の入ったダンボール箱を倉庫からレクテイの部屋に運んでいる途中だ。リコの細くしなやかな腕がぶるぶると震えていることからその荷物が重いことが見て取れる。

「なかなか骨の折れる仕事だ」

「でしたらお手伝いしましょうか？」

「む、ユーリか。君はカナタと訓練していたのではないか？」

運がいいのか、悪いのか。ユーリはリコのところにもやってきた。

「そうだな。そうすればわたしは楽ができ……。嫌、君の手を煩わせるような事ではない。気にするな」

そう言うとりコは再び足をレクテイの部屋へと進めた。

「ミソラさんだけでなく、リコさんもですか……」

ユーリは自分が何かしてしまったのではないか？という不安にかられ始めていた。

「カズキさんっ！これでいいですか？」

「ああ、いいんじゃないか？レクティは料理の才能あるよ」

「あ、ありがとうございますっ！」

一方その頃カズキとレクティは料理の準備をしていた。ユーリの為に2人は忙しなく働き続けている。そんなふたりの元に近づく影が1人。

コンコンコン

「は、はいっ！」

「レクティさん、少しいいですか？」

やってきたのはユーリ。あろうことか歓迎会を行う会場にやってきてしまった。

「か、カズキさんっ…ど、どうすればいいんですかっ!？」

「そうだな、とりあえず部屋の外でどうにかするしかないだろ。レクティ頼めるか？」

「わ、わかりましたっ！」

レクティはユーリに対応するため部屋の外へ出ていった。

「さーて、あとはカナタだな」

「ユーリさんっ！お待たせしましたっ！」

「あの、部屋で何をされてたんですか？」

「お、お料理してましたっ！ケーキを焼いてたんです！」

レクティはおどおどしながらもユーリの質問に答える。

「そうなんですか、良かったら一緒にしませんか？チョコレートクツキーとか得意なんですよ」

「そ、それは凄く美味しそうなんですけど…今日はカズキさんにお手伝い頂いてるので…あのう…そのう…」

「…そうですか。わかりました、お邪魔そうなのでわたしは行きますね」

「じゃ、邪魔つてわけじゃないですよっ！」

「レクティさんは優しいですね。ではまた」

「は、はいっ！また後でっ！」

ユーリが去っていくのを見て安心したレクティは部屋の中へ戻っていく。そんな姿を遠目で見ていたユーリは。

「もしかしてユーリ菌でしょうか…」

ユーリ菌等という意味不明なウイルスの名前を呟きながらしよんぼりと歩いていった。

「ようユーリ。さつきぶりだな」

「…カナタ先輩」

「これから買い物でも行かねーか？」

「…なんでですか？」

「ん、言わなかったか？今日のお前、全然笑ってないぜ」

「はあ…」

絶妙なタイミングで現れたカナタにユーリは不信感を抱きつつもカナタの誘いに乗り街へと歩みを進めた。

「あつ…、これ可愛い…」

ユーリとカナタが入ったのはアクセサリやネックレスを扱う店だった。ユーリはそこで十字架をモチーフにしたシンプルデザインのネックレスに目を止めた。

「ん、これか？」

カナタはそのネックレスを手に取りユーリの前に差し出した。

「えっと…」

「着けてやるよ」

カナタはそのネックレスをユーリの首へとかける。ユーリはどうせならもっと可愛げのあるものに目をつければよかったと少し後悔していたが、そんなものはすぐに吹き飛んだ。

「似合ってるぜユーリ」

「なっ…／＼／＼」

カナタのその一言だけで舞い上がってしまう自分にユーリは恥ずかしくなりながらもその言葉を素直に受け取ることにした。

「ありがとうございます…／＼／＼」

「ん、そろそろ時間か悪いなユーリ。ちよつと用事があるから先に校門までいっててくれねーか？」

「あ、はい…」

カナタから告げられた楽しい時間の終わり、ユーリはしょんぼりと眉を八の字にしながら校門へと向かい始めた。

そんなユーリの姿を確認したカナタは…

「すみません、このネックレスください。はい、プレゼントようにお願  
いします」

先程ユーリが試着していたネックレスをちやつかり購入していた。



「はあ…やっぱりユーリ菌なんでしょうか」

校門に着いたユーリはまたユーリ菌という意味不明なことを呟き始めた。

「待たせたなユーリ」

「カナタ先輩。…えっ!？」

ユーリはカナタの声に振り返ると同時に視界が真っ暗になったことに驚いた。

「今からある場所に着くまで目隠しさせてもらうぜ」

「わ、わかりました」

ユーリは何もわからぬままカナタに連れられて歩いていく。躓いた時などさりげなく支えてくれるカナタの優しさに内心キュンとしているのだが、それよりもミソラたちの自分への接し方にまだ不安な顔をしていた。

「着いたぜ、じゃあ目隠しは外すからな」

「は、はい」

ユーリは緊張した様子だが、目隠しを外すカナタの表情は晴れている。

ユーリの目隠しが外された次の瞬間、彼女の視界に広がったのは見覚えのある部屋と…

「「「ユーリ（さんっ）!!! Eー601小隊へようこそ!」」」

見覚えなる仲間たちの姿であった。

「えっ?これはどういうことですか?」

ひどく混乱した様子のユーリにカズキが状況を説明する。

「お前の歓迎会だよ。仲間のことはちゃんと迎えなきゃだめだろう?」

「ユーリさん! 買い物手伝おうとしてくれてありがとうございます! これからも迷惑かけるかもしれないですけどよろしくおねがいしますっ!」

「ミソラさん...」

「ふむ、先輩ながら荷物運びを手伝おうとする君の姿勢は尊敬できるぞ。これからよろしく頼む」

「リコさん...」

「ユ、ユーリさん! こんどチョコレートクッキーの作り方教えてくださいなさいねっ!」

「レクテイさんまで...」

ユーリの目に涙が浮かぶ、先程までの不安はどこへ行ったのやらと言った様子だ。

「俺からはこれだ」

「カナタ先輩…」

カナタは先ほどの店舗で購入したネックレスをユーリの首にかける。

「やっぱり似合ってるぜ」

「あ、ありがとうございますっ：／／／」

「俺からはこれだ。レクテイと2人で作ったから味は保証するよ」

カズキがユーリの元へ持ってきたのは美味しそうな料理とケーキの数々。

「…すごいですね」

「まあ、可愛い後輩のためだからな」

「カズキ先輩…」

「それじゃあ主役も揃ったし歓迎会始めるか」

カナタの掛け声で歓迎会がスタートする。

そんな中ユーリは

「ユーリ菌じゃなくてよかった…」

「ん、なんかいったか？」

「い、いえ！なんでもないです！」

ユーリ菌ではなかったことに安堵していた。

## 大きすぎる力

何故アイゼナツハ流魔双剣術を使わなかったっ!!あの時そなたが躊躇わず使用していれば、アリアはあんな目に遭わずにすんだ筈だっ!!

この言葉がレクテイの心に深く突き刺さる。

彼女が《ミストガン》にやって来た理由は自分を変えるためであった。

《ミストガン》の闘技場、ソーサラーフィールド内で4人の少女がツーマンセルに分かれて戦っているのを空色の髪をした青年、カズキ・アルカラスと黒髪の青年カナタ・エイジが見ていた。

「ユーリはやっぱりミソラたちとはレベルが段違いだな」

カズキが今見ているのはユーリとレクテイが対峙している場面だ。

「なかなかやりますね」

ユーリは特務小隊である自分とほぼ互角に渡り合うレクテイに賞賛の言葉をかける。

「え、えーつと…そ、そのう…」

「次は魔槍戦技を使わせてもらいます。全力でこないと厳しいですよ？」

「お、お願いしますっ！」

レクティがペコリとお辞儀をするとユーリが突撃態勢を取り、穂先の延長線上にレクティの姿を捉える。

『リコさん、タイミングに合わせて援護をお願いします』

ユーリはリコに援護を要請するが

『断る』

あっさりと断られてしまう。

『何故ですか…？』

『疲れるからに決まっているだろう』

その言葉にユーリはため息をついた後、援護してもらおうのを諦め単独で突っ込むことに決めた。

魔槍戦技―裂翔槍（エアレイドスピア）

魔槍に刻み込まれたルーン文字が蒼穹の輝きを発し、同時に穂先が渦巻く疾風を宿した。

レクティも迎撃するために魔双剣のルーン文字を黄金色に輝かせるが、その光は一瞬で消え失せた。

レクティは魔双剣をX字に構えるが、防ぎきれない。

裂翔槍がレクティを直撃し彼女の華奢な身体が吹き飛ばされる。

「大丈夫ですか!?!レクテイさん!!」

ユーリは気絶して急降下していくレクテイを追いかけていく。

そんな様子を見てカナタとカズキは妙だと感じた。

2人は知っている、レクテイがどんな訓練にも一生懸命で手を抜くような正確でないことを。

そして2人はある結論を出した。

「なあカナタ」

「なんだ?」

「レクテイはさ…」

「ああ、俺も思ったよ」

「あの時の俺（お前）と同じだ」

実技訓練終了後のEー601小隊室。

カナタが教え子たちに今後の予定を説明している。

「つーことで、明後日からの交流学校については俺がすべて予定を組むから明日はそのために時間を費やす。つまり明日は休みな」

《ミストガン》などの空戦魔導士養成機関では定期的に交流学校があるためカナタは教え子たちが知っているで話していたが、途中でしまったというような顔になった。

「あたしは去年の今頃丁度解散してた…」

「ふむ、私は孤高の存在であつたぞ」

「あとう…恥ずかしくて誘われても逃げてました…」

案の定彼女たちは交流学校学校についてよく分かっていないようだ。

「まあ大丈夫だ！俺がワクワクする経験させてやるよ」

その言葉にミソラの顔が険しくなる。

不審に思ったカナタはミソラの顔を除きこみ

「お前ほんとにミソラか？いつもなら食いついてくると思ったんだが」

「その、あんた…ううん」

「??」

ミソラはゴニョゴニョと口ごもった後

「エ、エイジ教官の行動に意図があることくらい…もう気づいてるわよ」

次の瞬間、カナタの表情が凍った。

小隊室の、後方ではカズキが腹を抱えて笑っている。

その大きい琥珀色の瞳からは笑いすぎて涙が零れていた。

「そ、その呼び方はやめろよ」

ミソラとしては思うことがあったのことなのだろうがカナタにやんわりと断られてしまった。

「で、でも…」

「なら渾名でも考えてくれ、じゃあ今日はここまで。カズキはちよつと来てくれ」

そう言つてカナタはカズキを連れて小隊室から出ていった。

取り残された少女たちの元へ

「これは何なんですか!!カナタ先輩!!カズキ先輩!!」

怒りの表情をしたユーリがやって来たのはその数分後であった。

「話ってなんだ?」



「ああ、レクテイの事だ」

「だろうと思った、レクテイのことは俺に任せてくれないか？あの時カナタが救い出してくれたように、俺がレクテイを自由にさせて見せるよ」

「じゃあ頼む、俺はリコとユーリの仲を何とかする」

今後の教育について話した後、2人は分かれた。  
カズキは寮へと帰る道のりで

「強すぎる力故の恐怖…か」

懐かしそうに過去のことを思い出していた。

## カズキの過去

「カズキ！はやくはやく！」

「リユーネ、待ってくれよ〜」

ここは《ミストガン》上空訓練空域、逃げる茶髪ショートカットでクリクリとした大きい青い目をした少女エクセリア・ローズを、淡い空色の髪をした長身痩躯の少年カズキ・アルカラスが追いかけている。

「もー！カズキはいつもゆっくりさんなんだから！」

「あはは、ごめんごめん。でもエクセリアが速いもんだから」

「それでもC―357小隊の隊長だもん！」

「知ってるよ。いつもさんきゅな」

魔剣を構えたエクセリアは、ふふんと胸を張る。

そんな様子を見たカズキの表情は自然と穏やかなものになっている。

2人の様子は傍から見れば恋人同士に見えるのかもしれないが、彼らはただの幼馴染みでありチームメイトだ。

そんな2人に近づく少女が1人。

魔弓を構えながらゆっくりとやって来た銀髪で童顔の少女はリユーネ・エスカマリである。

「2人とも！訓練が終わったからって気を抜きすぎよ？この後も小隊室に戻ってミーティング」

リユーネのセリフにエクセリアの表情が強ばる。

「リユーネく今日はもうちよつと遊ぼう？」

「だめよ、明日は大事な任務があるんだから」

「うー、カズキも何か言ってよ！」

「ごめんな、明日の為に戻ろう」

「はーい…」

3人は《ミストガン》へ向けゆつくりと降下していく。

この時の彼らは知る由もなかった…こうして3人で遊び、訓練に励むことが最後になるということを…

「じゃあ明日の任務について説明するね。私たちC-357小隊に課せられてるのは消息を絶った小隊の捜索及び周辺空域の警戒よ」

リユーネが明日の任務について淡々と2人に説明する。

それを聞いているエクセリアとカズキの表情は真剣その物なので説明するリユーネにもチカラが入る。

「変位種の目撃情報もあるから、遭遇した場合は《ミストガン》へ即撤退、撤退不可能な場合は援軍が来るまで持久戦ね」

「そうか、じゃあフォーメーションはどうする？いつも通りエクセリアが前衛、俺が中衛でリユースが後衛か？」

カズキの言葉に反応したのは隊長であるエクセリアだ。

「うん！いつも通りが一番だよ！慣れないことをして怪我したら大変だもん！」

「そうね、エクセリアの言う通りよ。普段通り行きましょう」

「了解だ」

「じゃあ今日のミーティングはここまでね！アイス食べに行こ！」

エクセリアはミーティングを強制的に終了させ、2人の手を引いて走り出す。

そんな彼女に引つ張られる2人は「やれやれ」といった表情をしていたのである。

翌日、3人は担当空域を飛行しながら消息不明の小隊を探していた。

昨日までの明るい雰囲気とは打って変わってピリピリとした緊張感の中での任務、それぞれが魔装を構えながら周囲を警戒する。

1通り捜索をし終えた3人は《ミストガン》へと通信結晶で報告しき帰還ようとしたのだが次の瞬間：ゾクリとした悪寒が3人の背筋を走った。

現れたのである、報告にあつた変位種が。

キメラ・アステロイド、蜻蛉の様な姿をしておりその羽音は三半規管に異常を来すという。

「2人とも！退路を拓くよ！」

隊長であるエクセリアの掛け声に合わせて魔甲蟲と対峙する。

魔双剣のフローラを構えたカズキはどの方向から襲われてもいように神経を研ぎ澄ます。

魔剣のラ・ピュセルを構えたエクセリアは退路を拓くべく魔甲蟲の中へと突入、魔弓のシルヴィを構えたりユーネは変位種の足止めを行っていた。

「エクセリア！そっちは大丈夫か？」

「わたしは大丈夫！リユーネは！」

「《ミストガン》への援軍の要請は終わってる！あと数分で到着予定よ！」

3人はCーランク小隊とは思えないコンビネーションで魔甲蟲を殲滅していく、彼らの運命の歯車が狂ったのはこの次の瞬間だった。

「えっ？？」

先程まで遠くにいる事を確認していたキメラ・アステロイドが

リユーネの背後、至近距離に迫っていたのである。

「嘘……！羽音は聞こえなかったはず!?」

「リユーネ！逃げて!!!」

「あぐっ……かつ……」

次の瞬間、キメラ・アステロイドの羽がリユーネを襲った。

キメラの羽はリユーネの腹部を貫通し、上半身と下半身は断裂、絶命は確実にリユーネは広大な海へと墜ちて行った。

「そん……な……。えっ……」

突然の仲間の死に絶望するエクセリア、そんな彼女の元に恐ろしいほどのスピードでキメラが迫る。

「エクセリアー！危ない！」

魔双剣戦技―千年氷牢（エンドレスフリーズ）

間一髪の所で和生が魔双剣戦技を放ちキメラを吹き飛ばす。

カズキは脅えるエクセリアの元へと超速飛行で近づき、彼女を抱える。

「カズキ……？どうするの」

「俺が今からお前を抱えて全力であのキメラを振り切る、もし無理だと思っただらお前だけでも逃げるんだ」

「でも……」

「お前は隊長だっ!!隊長を守るのは俺達の使命なんだよ!」

カズキはエクセリアの答えも聞かずに超速飛行を開始、展開していた魔装を魔双剣のフローラから魔剣のジノビオスに変更し、目の前に立ちはだかる魔甲蟲を薙ぎ払う。

しかし全てを捌き切れる筈もなく彼の身体には傷が絶え間なく刻まれていく。

「ねえ…カズキ」

「なんだ!?!」

「わたし…思うの。隊長だからこそ隊員をちゃんと帰還させなきゃいけない!…」

「エクセリア…」

「わたしね…ずっと言いたかったの…」

「何をだ!それは帰ってからでいいだろ?」

カズキは速度を下げることなくエクセリアにそう告げる。

「ううん…今じゃなきゃダメ。カズキ…」

「なんだ!?!」

「大好きだったよ」

「はっ？」

次の瞬間エクセリアはカズキの腕からスルリと抜け出し、追ってくる魔甲蟲へと立ちはだかる。

「何をやってるんだ！早く来いよ！エクセリア！」

「ううん、ここでわたしが頑張るの」

その言葉と共にエクセリアの構える魔剣のルーン文字が輝きを放つ。

「じゃあね…カズキ」

魔剣戦技―白龍の逆鱗（デイバインアウラ）



ラ・ピユセルから白い火焰が放たれ、周囲にいる魔甲蟲を焼き尽くす。

エクセリアの全力の一撃がキメラを襲い、撃墜に成功したと思われるた。

しかし、キメラは顕在でエクセリアは魔力を使い果たしたのかリユースと同じく海へと墜落していく。

カズキはエクセリアのもとへと直ぐに向かい、彼女を受け止める。

「エクセ…リア…？目を覚ませよ…なあ…お願いだ」

しかし彼女は目を覚まさない、そして次の瞬間…彼女の体は突如光に包まれ、その光と共に霧散しカズキに入ってしまった。

その後だ…

パキッ

カズキの力のリミッターの枷がはじけ飛び…



## 殲滅する剣

「はあ…はあ…俺の仲間をよくもやってくれたな…」

今のカズキの状態を見て大丈夫だという人間はいるだろうか、いやない。

彼の琥珀色の瞳は完全に据わっており、周囲を飛び交う魔甲蟲をひたすら斬り裂いている。

リミッターの枷が外れたカズキは己の尋常ではない魔力量に飲み込まれつつあったのだ。

「お、おい…何なんだアレは!?!」

応援に駆けつけた他の小隊が彼の姿を見て驚愕する。

全身から溢れ出る黒いオーラと圧倒的威圧感に小隊たちは思わず後ずさりした。

しかし、その小隊の中に後ずさりせず、寧ろ前へと進む小隊があった。

そう、この小隊こそがカナタ・エイジが所属するD—128小隊なのである。

「クロエ、今の状況は」

カナタがクロエに現状を説明させる。

「C—357小隊が変位種に遭遇、2人が…犠牲になったみたい」

「そういう事か」

カナタは瞬時にこの状況を把握した。

目の前で戦っている少年が仲間を失ったこと、そしてそれが暴走の

原因だということ。

「よし、クロエ、ロイド。俺らで変位種を倒せるかは分からねーけど、とりあえずアイツは止めないとな」

そう言うカナタに頷くクロエとロイド。

3人はカズキの元へと飛行していった。

一方カズキは魔甲蟲を薙ぎ払い、変位種の元へとたどり着いていた。

「確実に仕留める。この新たな剣でお前を…殺す」

カズキがそう言い放つと握られていたブラスター・ダークの柄の部分からカズキの体に漆黒の魔力が纏わり付く、その姿はさながら魔装を全身に纏わせた様である。

今の彼の姿はまさに暗黒騎士、憎しみと悲しみに取り憑かれたように変位種へと飛び立った。

「(体が軽い…まるで別の生物にでもなった見たいだな)」

カズキの振り抜いた一閃はキメラ・アステロイドの羽を切り裂いた。

圧倒的なチカラで何度も何度も剣を振り抜く、しかしカズキの体は

そんなチカラに耐えられるはずもなく悲鳴を上げ続けている。

「もうよせ！撤退だ！」

そんな彼の元へカナタがやって来た。

カナタはグラディウスを構え、カズキのブラスター・ダークを受け止めた。

「邪魔をするな…アイツは…リユースをエクセリアを！俺の大切な仲間を奪ったんだぞ!？」

激昂するカズキはカナタに剣を突き立てた。

「カナタ！」

叫ぶクロエにカナタは制止のジエスチャーをしてあえて彼の一撃を受けた。

それはカナタの腹部に刺さり、そこからはとめどなく血が溢れ出る。

「あれ…？俺は何を」

カナタに剣が刺さった瞬間、カズキの意識は元に戻った。

「なんで…俺は人を刺してるん…だ？」

そこで意識を失ったカズキと傷を負ったカナタは墜落していく。

それを受け止めたクロエとロイドはすぐさま撤退し、援軍の小隊と合流した。

その後変位種を牽制しつつ、《ミストガン》の位置を魔甲蟲に知られることもなく無事？撤退に成功した。

意識を取り戻さないカズキは医療機関に搬送され入院している。  
カナタも、傷は深いのだが断固として入院を拒否したんだとか…  
こうしてC―357小隊の戦いは…幕を閉じた。

もう1人のアイゼナツハ

学園浮遊都市《メルキア》。

外觀は《ミストガン》とほぼ変わらない。

《メルキア》との交流学校は3日間。最終日である3日目には、メインイベントである交流戦が例年催されている。

残りの2日間も各学科同士の技術を競い合うイベントが開催され、一般学生が愉しめるイベントとなっている。

しかしその裏側ではありとあらゆる方面での合同協議が控えているのだ。

ガーディアンリーダーであるフロン立ちにとっては目の回るような忙しさである。

「ふーん、《ミストガン》と似たような作りなのね」

「ま、同じ学園浮遊都市だからな。違いがあるとすりや教育方針だろ」

「教育方針……？」

カナタの言葉に首をかしげるミソラ、そんな彼女を見てレクテイ、リコ、カズキ、カナタの4人はため息をつく。

「ね、ねえエイジっち。今日の予定なんだけど…」

ミソラはカナタからの指示通り渾名を考えてきたようだが。

「今のは聞かなかったことにしてやるから夜までに別の渾名な」

「う、うそ!?夜通し考えたのに…っ!」

5人はこんなやり取りをしながら《メルキア》のドーム壁の外側へ

と集まっていた。

この後簡単な持ち物検査を受けた後、都市内へと入ることが許可される。

開会式でのエキシビションが予定されているユーリは一足先に開会式が行われる闘技場へと赴いていた。

特務小隊の一員であるカナタとカズキは『教官だから』、という理由でエキシビションを欠場している。

ユーリを説得するのに手を焼いたのは言うまでもないだろう。

カナタたちは嚴重にロツクされた隔壁を通り、『メルキア』の市街地へと進んでいく。

そこは大通りを中心に無数の屋台の組み立て中であつた。

道行く人々の殆どが闘技場を目指しており、5人もその流れに従つた。

カズキが周囲を見渡すと、やけにキョロキョロとあたりを見回すリコの姿が目に入った。

「リコ、知り合いでもいるのか？」

「ふっ、わたし以上の美貌の持ち主は、ここにもいないようだな」

「女神さまはそういう所しか見てないんだな」

その時、ふとレクティが立ち止まり、物欲し気な表情を浮かべた。

彼女の視線の先には、開店準備を行っている屋台の姿、割り箸に巻き付けた白い雲のようなお菓子を店員が作っていた。

その姿を見かねてカズキが声をかける。

「レクティはわたあめが食べたいのか？」

「え、ええーつと。そ、そのう…」



レクティは俯いたまま、モゾモゾと口を動かすだけだ。

言いたいことはあるのだが、言い出せないらしい。課外授業である後ろめたさもあるのだろうが、レクティはいつも遠慮しがちなのだ。

「食べたいの？それとも違うのか？」

「そ、そのう…」

申し訳なさそうに人差し指をつんつんとくつつけ合わせるレクティ。

「（遠慮することないのにな。俺が教官だつてことに気を遣いすぎなんだよな）」

いつまで経っても口に出せそうにないレクティの為にカズキは助け舟を出した。

「屋台の開始は開会式の後だし、明日はこの辺りは屋台で埋め尽くされるから、その時に買ってあげるよ」

屋台の売上が最も伸びるのは2日目である。その理由は3日目に交流戦があるため、闘技場に人が密集するからだ。

そのため稼ぎ時である2日目には、大通りを囲むように屋台が出揃い、どの屋台が美味しいかという情報も揃うのだ。

普段からカナタの手伝いでロジステイクスと関わっているカズキはそのことを知っており、確実に美味しい食べ物にありつけるという訳だ。

「えっ!?!そ、そのう…ごちそうして頂かなくても、あとで自分で買いに…」

「そう言うことを言えるレクテイだから、奢ってあげたいと思うんだよ」

カズキの口元が自然と綻ぶ。

「…約束。指切りでもしようか」

ぶつきらぼうにカズキがレクテイの小指に指を絡める。  
するとレクテイがさも嬉しそうに微笑んだ。

「良かったわね。レクテイ」

そんな2人のやり取りを見ていたミソラは、片目を瞑ってウインクして見せた。

「な、なんでこんな所にいるの!?!」

闘技場についたミソラたちはカナタとカズキに付いていく。

彼らは警備の学生たちがいる関係者用の通路を通り、闘技場の2階部分に位置するプライベート空間ーVIPルームの前に立っていた。

「ここならエキシビジョンがよく見えるだろう?」

カナタの言う通り、ここからフィールドの見晴らしは最高だ。

フィールドに面する壁は全面ガラス張り。ソファアや大きめのテーブルが備え付けられており、ルームサービスのメニューなども完備してあった。

目敏くマツサージチェアを見つけたリコは、当たり前のようにクライニングにして座った。

「ふむ、VIPルームか。わたしに相応しい空間だな」

「ま、いいけどさ。エキシビションが始まったらちゃんと観戦するんだぞ？」

そんな様子のリコにカナタが軽く注意を促す。

一応授業中なのだが堂々としたものだ。

一方でミソラとレクティは豪勢な空間に足が竦んで入れないようだった。

見かねたカズキが手招きをして漸く室内に足を踏み入れる。

「ね、ねえ。こんないい場所どうやって確保したの？」

おそろおそろといった調子で、ソファアに腰掛けたミソラが尋ねた。

「クロエに特務用の席はどこか訊いておいたんだよ。エキシビションの間はクロエたちはいないし借りさせてもらってるんだ」

カズキがミソラにこの部屋を使っている理由を説明した。

それに続いてカナタが付け加える。

「ちゃんと許可は取ってるから気にすんなよ。間違っても無断侵入とか不法占拠じゃねーからな？」

考えていたことを当てられたかのようにミソラの表情が強ばる。  
そんな時レクティが声をかけてきた。

「あ、あのう…カズキさん、カナタさん…？の、飲み物です。冷蔵庫の中に入っていたので、ど、どうぞっ！」

グラスに注がれたパインジュースがテーブルに置かれる。

誰が命じたわけでもないのにこういったことを出来るのはレクティの良いところだと2人は評価している。

「ありがとな」

「さんきゅーな」

カズキとカナタにだけでなく、リコとミソラにも飲み物を配っている。

周りへの配慮を欠かさないのは、彼女の優しい性格の表れであり、美点だ。

性根が優しく、内気だが強い魔双剣士。それが2人のレクティに抱く印象だ。

3人の中でレクティが最も戦闘スキルに優れているのは疑う余地もない。

だが、レクティは周りの目を疑いすぎるため、弱点であるあがり症は克服したものの、未だ全力を出せていないのだ。

「(優しすぎるんだよな…)」

カズキはそう思う。

周りを気遣うこと、相手を気遣うこと。それはとても大事なことがやりすぎは良くない。

カズキは考えすぎた頭をリセットするべく、グラスのジュースを一口呷った。程よい酸味が口に広がり思考を冷静に指せる。

「さてと、そろそろエキシビションが始まるぜ。全員窓際に移動しろよ」

カナタの声に反応し、4人は窓際へと足を運んだ。

《メルキア》側の代表生徒のエキシビションが始まるのと同時にアルケナル級のダミーバードが大量に投入される。

フィールドを埋め尽くさんばかりの規模に観客たちは息を呑んだ。

《メルキア》の代表生徒たちの数は4人、それぞれが魔剣や魔銃を握りしめる。

嵐に荒れ狂う大波のようなダミーバードの大群に、荒々しく猛々しい『剛』の攻撃で突入する。

それぞれが周りを気遣うことなく、己の役割のみを果たす戦闘スタイル。

その結果として生み出されるのは、独立した指揮者たちの協奏曲。奏でる楽曲は戦闘によって生じる破壊の爆発と騒音だ。

中でもとりわけ、強力な学生がいた。

武人のように険しい双眸。月の光を集めたように輝く、銀色の髪をした少女だ。

彼女の振るう魔双剣は接近した10体のダミーバードを一瞬で撃墜する。

「ふんっ！この程度くだらんわっ！」

言い捨て、銀髪の少女は急上昇。

彼女を墜とさんとするダミーバードたちが樹液に群がる蟲のように群がっていく。

ある程度の数が集まった時、彼女は急降下し魔双剣戦技を放つ。

アイゼナツハ流魔双剣戦技―千衝撃

両手に持った魔双剣が、ハリネズミのような刺突を放つ。

高速で放つ刺突技の壁、銀髪の少女―ブレア・アイゼナツハの圧倒的な戦闘力にダミーバードはすり潰され、観客席からどっと歓声が沸いた。

VIPルームでその様子を見ていたカナタはこういった。

「ふーん、やっぱ今年も個人の戦闘スキルの披露か」

尋常ではない戦闘力を見せつけた少女への称賛は全くなく、寧ろ興醒めしたような貌をしていた。

そんな彼に続いてカズキが口を開く。

「《メルキア》の教育方針は個人の戦闘力を追求すること。でもそれっ

てつまりは独りで戦う力を付けるってだけで信用する仲間是要らな  
いって考えだろ？俺はそういうのは嫌いだな」

そう告げる彼らを見たミソラは、教官たちがここまで他者を批判す  
るのは珍しい、と思う。

だがそれは彼らにも確実な教育方針があり、先程までの戦い方が彼  
らのそれに反するものなのだと考え直した。

「お前たちの中で1番戦闘に秀でてるのはレクテイだ。もし運悪くレ  
クテイが強大な魔甲蟲と1対1で戦うなんて事になったら、そのとき  
はさ…」

言いかけてカズキはぼーっとしているレクテイに気づく。

「レクテイ、大丈夫か？」

「えっ…？」

気もそぞろいなレクテイが慌てて答える。

「あっ。は、はいっ…！」

「もしかしてさっきの銀髪の彼女、レクテイの知り合いか？」

『さっき』という言葉がエキシビジョンに参加していた少女を指すこ  
とはすぐに分かった。

彼女が用いた魔双剣術は、アイゼナツハ流。レクテイと同じ流派  
だ。剣神と奉られた者が生み出し、最強の魔双剣術。

「なんと言いますか…そ、そのう…知り合いと言うのではなくてです  
ね。もつと…あのう…」

レクテイが言いよんどんでいると、VIPルームもドアがいきなり開かれた。

ノックなしで開かれた入口には、先程までエキシビションに参加していた、武人の如き険しい表情をした銀髪の少女が立っていた。

「カナタ・エイジはいるか？」

「ん？俺だけど」

カナタが椅子から立ち上がり返事をした途端、周囲の空気が張り詰めていく。

銀髪の彼女がカナタへと気迫とも言えるオーラを放っている。

「そなたがカナタ・エイジか」

突然の来訪者が誰なのかわかった途端、レクテイはカズキの後ろに隠れ、彼の制服の裾をぎゅっと掴んだ。

「お前って、エキシビションに参加してた。えーつとなんて名前だっけ？」

「《メルキア》空戦魔導士科予科2年、ブレア・アイゼナツハだ」

彼女が名前を名乗った直後、ミソラが思わず呟いた。

「アイゼナツハ…って？」

その場にいた全員の視線がカズキの後ろに隠れるレクテイに注がれる。



「むっ！……レクティ!?」

ブレアの険しい双眸がレクティを捉えた。

「あ、あのう…ブレアさんっ!?何故あなたが、ここに…!?」

「そなたに話す義理などない。ようがあるのはカナタ・エイジ。そなただ。何でも《ミストガン》で1番強いらしいな」

ブレアの鋭い視線がカナタへ向けられる。

「誰に聞いたんだよ?」

「クロエ・セヴェニーだ。彼女が最強だと噂されていたが本人曰くそなたの方が強いらしいな。隣にいたロイド・オールウィンも同意していたぞ」

「ああ、あいつらか。…それで要件は?」

「手合わせ願おう。できるだけ実践に近い形でな」

そう言いながらブレアは屋内にも関わらずミスリス魔装を展開する。

重厚感のある、刀身の長い魔双剣が虚空から出現。八双の構えを取って見せた。

カナタはさり気なくブレアの隙を伺ってみたが、ブレアの構えには微塵も隙が無い。

正真正銘のアイゼナツハ流だろう。

「そっぴゃお前も魔双剣使いなんだったな」

そう言つてカナタはカズキの方を見やる。  
そんな彼の様子にかズキはまさか…?といった顔になった。

「あいつらがどう言つたかは分かんねーけど。《ミストガン》最強の魔  
双剣使いなら知つてるぜ」

カナタはクロエやロイドが自分に押し付けてきた厄介ごとをカズ  
キに押し付けることにしたのだ。

カナタは自分の言っていることは間違っていないと言つた様子で、  
冷や汗を流すカズキの方を指さした。

「そこにいるカズキ・アルカラスは事情があつてエキシビジョンには  
出てないが列記とした特務小隊の一員だ。魔双剣を使う者なら《ミス  
トガン》でコイツより強いヤツを俺は知らねーよ」

カナタの言葉にブレアの視線がカズキへと移る。

「ならば、カズキ・アルカラス。手合わせ願おう。《ミストガン》最強  
の魔双剣士の實力見せてもらおう」

「どうしても決闘しなきゃだめなのか?」

「肯定だ」

「なら俺の負けでいいよ」

それだけ告げてカズキはブレアから視線をレクテイへと向けた。  
そんな彼にリコが話しかける。

「なんだ?勝負しないのか?」

「俺は今はお前たちの教官だぞ？理由もなしに戦うことは出来ないし、こんな場所で戦ったらクロエに迷惑かけるだろ」

「ふむ、確かにそうだな。無益な戦いは無意味だ」

カズキは自分の陰に隠れるレクテイの頭に手を置いてもう一度行った。

「お前と戦う理由はないよ」

その言葉に考え込んだブレアは何を悟ったのか徐ろにカズキに近づいてきた。

勿論魔双剣は構えたままで。

「ならばこれでどうだっ!!」

無防備なミソラの喉元へといきなり魔双剣の刃を突きつける。突然の攻撃にミソラの頭が真っ白になる。教え子に刃を向けられたカズキは不愉快そうに眉を顰めた。

「な何のつもりだ？」

「これで戦う理由は充分かと訊いているっ!!」

彼女もなかなかの問題児らしい。

カズキが軽率な受け答えをしたことを若干後悔したときだ。

「あのう…や、やや、やめてくださいっ！ブレアさんっ！」

怯えながらもレクテイがアマノハバキリを展開して立ちふさがる。

「ふんっ！まだアイゼナツハ流を使っているのか！アリアを護れず、庇ってもらうだけの無能風情がっ！」

『アリア』と言う言葉でレクティの貌に明らかに影が差した。

何のことかカズキが尋ねようとした時、ミソラが魔砲剣をブレアに向けて振るった。

ブレアは舌打ちしながら後ろへ跳躍する。

「あんた何様のつもりよっ!!」

ミソラがビシツとブレアを指さした。

理不尽に晒された怒りからか、ミソラの怒気はブレアをも凌ぐものだ。

「そなたこそレクティのなんだ？」

「友達で仲間よっ！あんたがレクティに手を出すって言うなら、容赦はしないわっ！」

ミソラは砲口をブレアへと向けて魔力の収束を開始する。

「まからレクティにも友達ができるとはな」

怒りを込めた瞳でミソラたちを見渡すブレア。

「ふざけるなっ！わたしの妹を傷つけておきながら自分はこのうのと友達作りだど!?!どうせそなたらもレクティと同じ落ちこぼれなのだろう！」

ミソラとレクティの2人との対峙であつてもブレアは怯まない。寧ろ間合いを自らの得意とするものに詰めようとする。

「やれやれ、心外こそ極まれりだな」

音もなく忍び寄っていたリコがアテナの銃口をブレアの側頭部に向ける。

「先程から黙っていればわたしまで凡俗扱いとは、勘違い甚だしいぞ」

「お、お願いですからここは穏便につ！」

レクティの願いもむなしくブレアの敵意は一層増すばかりだ。

「…落ちこぼれの仲間など、くだらんわっ！」

言うや否や、ブレアの双眸がミソラを捉えた。

来るっ！直感的に把握したミソラが引き金を絞っていた。

屋内での魔力砲撃、間合いはほぼゼロ。

到底躲せる距離ではなく、最悪死傷者が出ることすら考えられる禁止行為。

しかしブレアはその砲撃を美しい袈裟斬りで弾き飛ばし、啞然としているミソラに鋭い右回し蹴りを入れる。

悲鳴と共にミソラが激しく吹き飛ばされた。

それと同時にリコが頭部へと威力を調整した魔力弾を放つ。

だがブレアは銃口から魔力弾が放たれる時には既にリコの懐へ潜り込んでおり、リコのアテナをはじき飛ばした。

ミソラが砲撃をしてから僅か3秒間での出来事だった。

「落ちこぼれ同士が群がったところでこの所詮程度だ」

冷たく言い捨てるブレアにレクティが立ちはだかる。

ブレアの暴走を止めるべく床を舐めるような低姿勢で斬り掛かる。

対するブレアは仁王立ちするかの如くレクティを斬り下ろそうと  
していた。

1人2振り、2人の魔双剣が交錯する刹那、同じく魔双剣を展開し  
たカズキが2人の剣戟を受け止めた。

「…な、なんだとっ！」

ブレアが驚愕の声を漏らす。妙な技の調べを奏でる。

カズキの披露したそれは、妙技と言っても過言ではない。

「お前らがここで戦ったら問題になるだろ。部屋も壊しやがって。ブ  
レアって言ったか？強いヤツと戦いたいなら交流戦の相手―E60  
1小隊を指名してくれよ」

カズキの言葉にカナタも笑みを零す。

「こんな落ちこぼれどもと戦えというのか!？」

「ミソラたちが落ちこぼれ…ねえ。じゃあもし勝てたら俺が本気で勝  
負してやる。それでいいな？」

「……」

「まずは合法的にミソラたちを倒してみろよ。俺との勝負はそれから  
だ。こんな騒ぎ起こして都市外追放になったらシヤレにならないし  
な」

都市外追放という言葉にブレアの貌が歪んだのをカズキは見逃さ  
なかった。

彼女程の実力者がアイゼナツハ流の聖地《オエクス》を離れここに  
いるのには理由があると踏んでのことだ。

「…いいだろう！こやつらを蹴散らしたあとにそなたを倒す。首を洗って待っている」

「あんたにだけは絶対負けないわっ！」

ブレアに蹴り飛ばされたミソラが意地で告げる。

「口だけは達者なようだな。そなたらも気を付けることだ。レクティはわたしの妹に重症を負わせた悪人だからな」

「悪人って…」

その言葉と同時に曇るレクティの表情。

それに気付いたカズキがフォローを入れる。

「何言ってるんだお前ら。この部屋をこんなに吹き飛ばしたんだ、お前ら全員悪人だよ」

あつけらかなと言いつつカズキにブレアが敵意の視線を送る。  
それに気づいてか気付かずか

「とりあえず戻って伝えてこいよ。わたしの相手はE―601小隊だっつな」

「ふんっ！言われなくてもそうするつもりだっ！」

そう言い残しカズキたちの元から立ち去っていくブレア。

こうしてミソラたちは交流戦参加への切符を手にすることになるのであった。